アルケス発掘調査報告5

平安京左京六条四坊八町跡

―　下京区鍛冶屋町における埋蔵文化財発掘調査　―

平安京左京六条四坊八町跡

2022年

株式会社　アルケス

株式会社　アルケス

平安京左京六条四坊八町跡

―　下京区鍛冶屋町における埋蔵文化財発掘調査　―

2022年

株式会社　アルケス

例　　言

1．本書は京都府京都市下京区堺町通松原下る鍛冶屋町 254 番地に所在する平安京左京六条四坊八町跡 (21H388) の報告書である。

2．本調査は、所在地の開発工事計画に伴って行われた試掘調査によって遺構が確認されたため発掘調査が行われた。

3．本調査は、株式会社パルコの委託を受けた株式会社アルケス（代表取締役　持田　透）が実施した。

4．本調査の発掘期間は令和４年２月７日から令和４年４月 19 日である。

5．本調査は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導・助言のもと行った。

6．本調査の体制は以下のとおりである。

調 査 主 体：　株式会社アルケス

調　査　員：　石井　明日香

7．本報告書の執筆は石井が行った。

編集は小池智美が行った。

8．本報告書では以下の地図を調整・編集した。

京都市地形図（１：２５００）「三条大橋」「五条大橋」 京都市都市計画局

9．本報告書で示す座標･方位は国土座標第Ⅵ系（世界測地系）､水準値は東京湾平均海水面（T．P.）に基づく数値である。

10. 本報告書で使用している条坊復元図は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所から座標資料の提供をうけて作成した。

11. 本報告書に掲載した写真は、遺構を石井、遺物を横山亮（オフィスメガネ）が撮影した。

12. 本調査にあたり、以下の方々に助言をいただいた。（敬称略・五十音順）

木立 雅朗（立命館大学）、國下 多美樹（龍谷大学）、鈴木 久男、西山 良平（京都大学）、山田 邦和（同志社女子大学）、吉村 龍二（京都芸術大学大学院）

13. 出土した遺物は、関連する図面、写真とともに京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課にて保管されている。

凡　例

1．写真図版の縮尺は任意である。

2．報告書に掲載した遺物番号は実測図、観察表、写真図版にそれぞれ対応している。

3．本報告書で使用した土色は、以下を使用した。

『新版　標準土色帖』 農林水産省農林水産技術会議事務局監修

4．出土した遺物の年代は、以下を参考にした。また遺物の時期表記は小森氏の編年に依拠した。土器編年とその年代観は図１とする。

小森俊寛　2005 『京から出土する土器の編年的研究－日本律令的土器様式の成立と展開、７世紀～１９世紀－』 京都編集工房

図１　土器編年・年代観

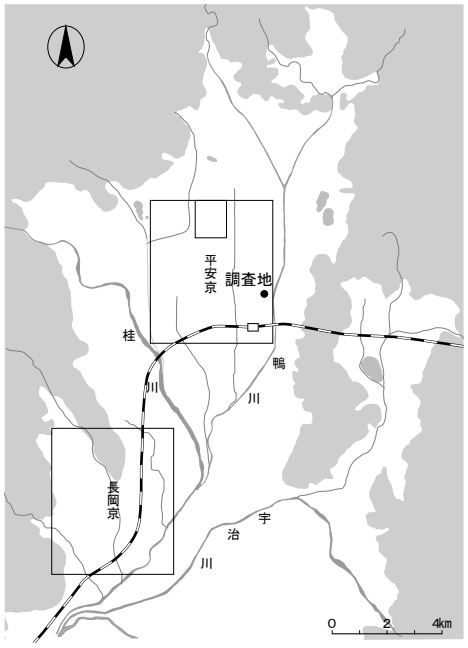


図２　調査地位置図

目　　次

１.調査経過 …… 1
２.位置と環境 …… 2
３.遺構 …… 4
（１）基本層序 …… 4
（２）遺構概要 …… 5
（３）第１遺構面の遺構 …… 5
（４）第２遺構面の遺構 ……13
（５）第３遺構面の遺構 ……16
（６）第４遺構面の遺構 ……18
４.遺物 ……20
（１）江戸時代の遺物 ……20
（２）室町時代の遺物 ……22
（３）鎌倉時代の遺物 ……24
（４）平安時代の遺物 ……24
（５）石製品 ……27
（６）瓦 ……27
（７）鍛冶関連遺物 ……29
５.まとめ ……31
（１）遺構の変遷 ……31
（２）鍛冶関連遺構について ……31
（３）性格不明遺構085について……31
附章　平安京跡で検出された粘土の元素マッピング分析……34

挿　図　目　次

図１　土器編年・年代観
図２　調査地位置図
図３　調査区配置図 1
図４　調査前全景 1
図５　作業風景 1
図６　調査対象地と周辺地図 2
図７　調査区壁面柱状図 4
図８　１区　第１・２・３遺構面全体図 6
図９　２・３区　第１遺構面全体図 7
図10　２・３区　第２遺構面全体図 8
図11　２・３区　第３遺構面全体図 9
図12　２・３区　第４遺構面全体図 10
図13　土坑030出土青銅製品 11
図14　個別遺構図１　井戸047・029、土坑030・158・166 12
図15　個別遺構図２　土坑160・170・171・172 14
図16　個別遺構図３　土器溜048、溝051 15
図17　個別遺構図４　性格不明遺構085 17
図18　個別遺構図５　井戸124 19
図19　遺物実測図１ 21
図20　遺物実測図２ 23
図21　遺物実測図３ 25
図22　遺物実測図４ 26
図23　遺物実測図５ 27
図24　遺物実測図６ 28
図25　遺物実測図７ 28
図26　遺物実測図８ 30
図27　遺構変遷図 32
附：図１　採取試料と分析試料の採取位置 34
　　図２　元素マッピング分析結果 36

表　目　次

表１　周辺調査一覧 …… 3
表２　遺構概要表 …… 5
表３　遺物概要表 …… 20
表４　鍛冶屋町変遷 …… 33
表５　出土遺物観察表 …… 37
表６　出土石製品観察表 …… 40
表７　出土瓦観察表 …… 40
表８　出土鍛冶関連遺物観察表 …… 40

図　版　目　次

図版１　３区第１遺構面　全景
２区第１遺構面　全景
図版２　１区第１遺構面　全景
１区第２遺構面　全景
図版３　３区第２遺構面　全景
２区第２遺構面　全景
図版４　１区第３遺構面上層　全景
１区第３遺構面下層　全景
図版５　３区第３遺構面　全景
２区第３遺構面　全景
図版６　３区第４遺構面　全景
２区第４遺構面　全景
図版７　井戸047
土坑030
土坑158
土坑170
土坑166
土坑160
土坑167
土器溜048
図版８　礎石建物１　検出
礎石建物１　検出

図版８　溝051
井戸124
集石遺構288
性格不明遺構085　断面
性格不明遺構085　遺物出土状況
性格不明遺構085　遺物出土状況
図版９　性格不明遺構085
性格不明遺構085
図版10　性格不明遺構085
性格不明遺構085　断面
性格不明遺構085　拡張前断面
性格不明遺構085　粘土掘削後断面
性格不明遺構085　粘土掘削後断面
図版11　出土遺物１
図版12　出土遺物２
図版13　出土遺物３
図版14　出土遺物４
図版15　出土遺物５
鍛冶関連遺物（土坑166出土）

1. 調査経過

今回の発掘調査は京都府京都市下京区堺町通松原下る鍛冶屋町 254 番地における集合住宅建設に伴う土地開発に先立って行われた。

遺跡としては、文化財保護法第 93 条に基づく届出（21H388）を受け、京都市文化財保護課による試掘調査が行われた。試掘調査の結果、対象地のうち 260 ㎡の発掘調査が指導された。株式会社アルケスは開発事業者である株式会社パルコからの委託を受け、発掘調査を実施することとなった。

調査は令和 4 年 2 月 7 日から表土掘削を開始し、4 面分の調査を行った。調査の都合上、南の短い区画（5 m × 8 m）を 1 区とし、北の長い区画（10 m × 22 m）を 2・3 区と分けて反転調査を行った。調査中、性格不明遺構を 1 区全面で検出し、北西方向に広がることから、京都市文化財保護課と相談し、北に 1.3 m、西に 2.0 mの拡張を行ったため、調査面積は 16.39 ㎡増え、276.39 ㎡となった。遺構面ごとに京都市文化財保護課の検査を受け、令和 4 年 4 月 19 日に終了した。

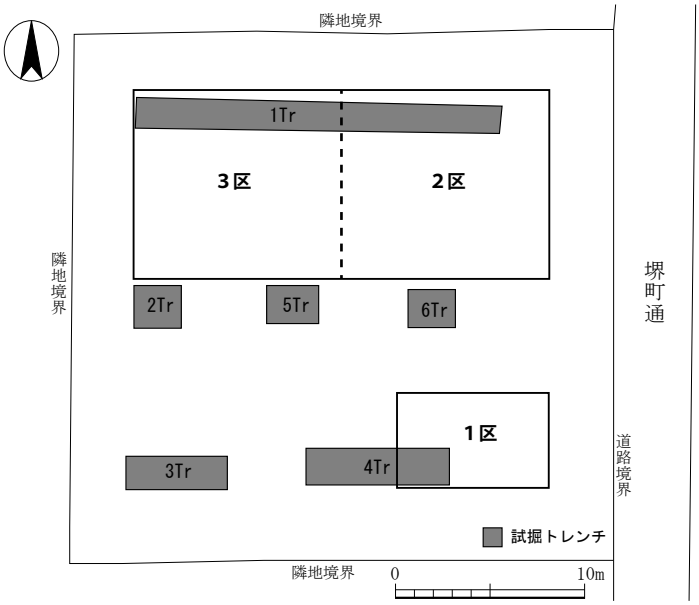


図３　調査区配置図（1/400）

図４　調査前全景（南東から）

図５　作業風景

2.位置と環境

調査地は、北を五条大路、南を樋口小路、東を万里小路、西を高倉小路に囲まれた、平安京左京六条四坊八町跡にあたる。当該地は文献資料上に明確な建物、居住者は明記されていない。

しかし鎌倉時代前期については、『明月記』『業資王記』『仲資王記』に見える、建暦元年 12 月の五条高倉周辺の焼亡についての記事によると、一町から八町にかけて中規模の邸宅が立地していたと考えられる[(1)]。

戦国時代後期には五条大路が下京惣構の南限であり、調査地はその外に位置する。豊臣政権下では天正地割による町割の変更で調査地は堺町通の西側に接するようになる。

近世に入ると「かじ屋町」（寛永一四年洛中絵図）とみえ、貞享 2 年の『京羽二重』には堺町通の諸職商家に針がね屋とあり、また、「鍛冶屋」の項に、松原堺町下る有次、有信の名がある。有次は現在本社が同町に残っており、永禄 3 年に「松原堺町下ル町」に刀鍛冶「藤原有次」が「有次」

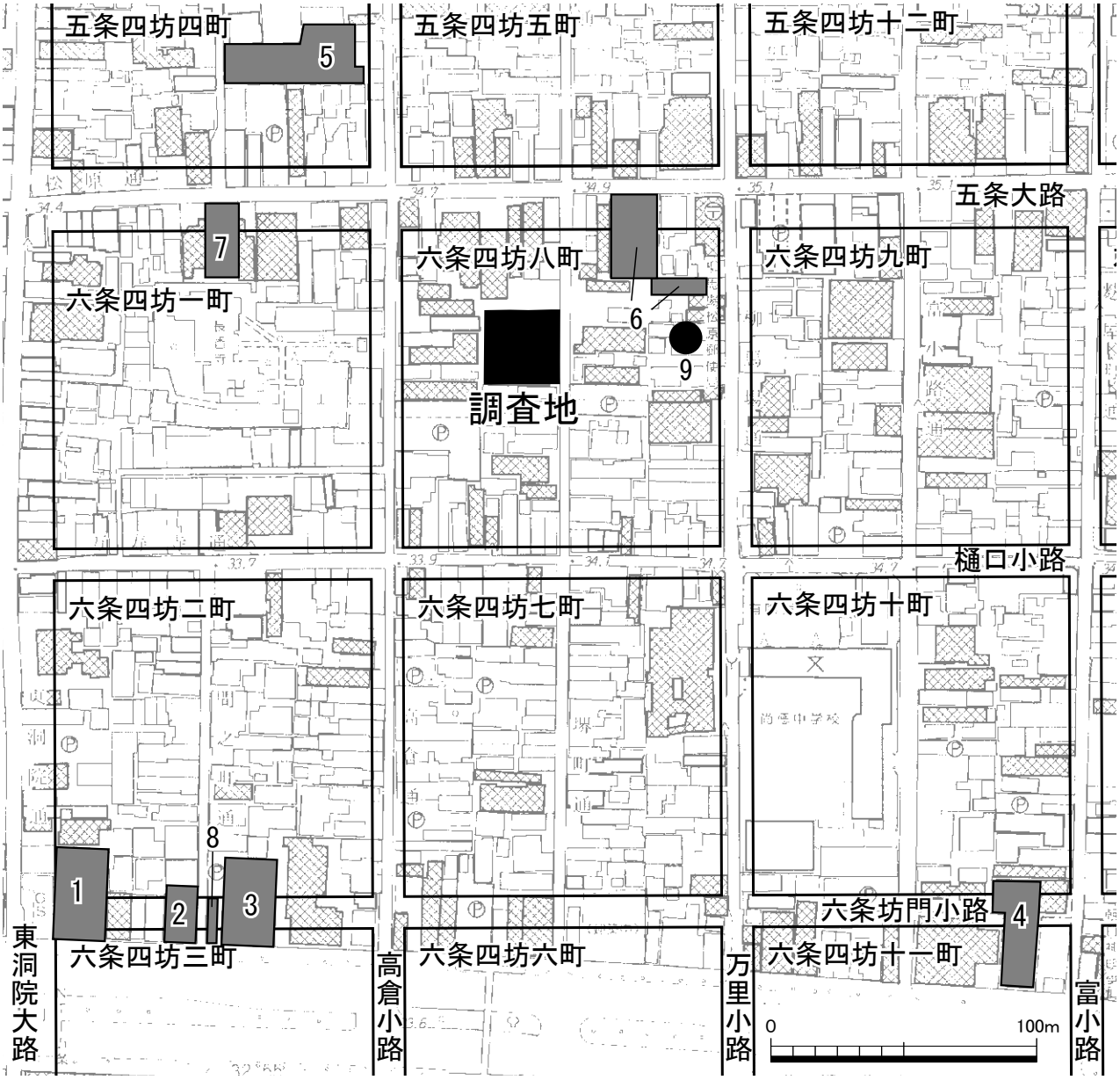


図６　調査対象地と周辺地図（1/2500）

を開業したことに始まる。明治期に鍛冶屋が衰退したものとみられる。

本調査地周辺における発掘調査の事例は少なく、当町内については本調査が１件あるのみにとどまる。平安時代～江戸時代までの各時代の遺構を多数検出しており、五条大路の南側溝や、近世～近代までの鍛冶関連遺構等を確認している（図 6-6）。

本調査では過去の周辺調査及び試掘調査の結果を踏まえたうえで遺構の確認を行った。一部攪乱で削平されているが、2・3 区は特に遺構面が概ね良好に残存しており、最大 4 時期の遺構を確認することができた。特に江戸時代に関しては、周辺調査と同様に鍛冶関連遺構が集中する様子も確認でき、当町の特徴を垣間見ることができた。

【註】

(1)『明月記』には「五条南、高倉西東」に「親房朝臣、定平、實綱卿娘（七条院高倉局）等」の邸宅があると記載されている。『業資王記』によると、「故親雅卿家等」が「五条南･高倉西」に所在している。「親房朝臣」は「故親雅卿」の次男であることから、邸宅を伝領していると考えられる。また『仲資王記』では、「藤右小弁家」が「五条高倉」にある。（西山氏のご教授による。）

表１　周辺調査一覧

番号	条坊	調査法	内容	文献
1	左京六条四坊三町	試掘	地表下 -1.42 m で平安時代中期の整地層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和61年度』京都市文化観光局　1987年
2	左京六条四坊三町	立会	地表下 -1.45 m で平安時代中期の包含層。-1.5 m で平安時代中期の包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和61年度』京都市文化観光局　1987年
3	左京六条四坊三町	立会	地表下 -1.9 m 以下、砂礫の地山層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成２年度』京都市文化観光局　1991年
4	左京六条四坊十・十一町	発掘	平安～室町時代の六条坊門小路路面および側溝。平安時代の池状遺構。平安末～鎌倉時代の井戸。鎌倉～室町時代の井戸、土坑、集石遺構。	堀内明博「平安京左京六条四坊・河原院跡」『平成６年度　京都市埋蔵文化財調査概要』㈶京都市埋蔵文化財研究所　1996年
5	左京五条四坊四町	試掘	奈良～室町時代の柱穴・土坑・溝。	「平安京左京五条四坊四町跡・烏丸綾小路遺跡№65」『京都市内遺跡試掘調査報告』京都市文化市民局　2017年
6	左京六条四坊八町	発掘	平安～鎌倉時代の五条大路南側溝。江戸時代の鋳造関連遺物。	『平安京左京六条四坊八町跡』株式会社四門　2020年
7	左京六条四坊一町	発掘	平安時代の溝・井戸をはじめ、江戸時代までの各時代の遺構多数。特に桃山時代以降の遺構が非常に多い。	『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1994年
8	左京六条四坊三町	立会	地表下 -1.15m 以下、灰褐色砂礫層。	『京都市内遺跡立会調査概報　平成５年度』京都市文化観光局　1994 年
9	左京六条四坊八町	詳細分布	地表下 -0.4 ～ 0.5 m でにぶい黄褐色礫混シルトの近世～近代焼土層。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告　令和２年度』京都市文化市民局　2021年

3. 遺構

（1）基本層序

１区と２・３区で大きく様相が異なるため、基本層序は分けて報告する。

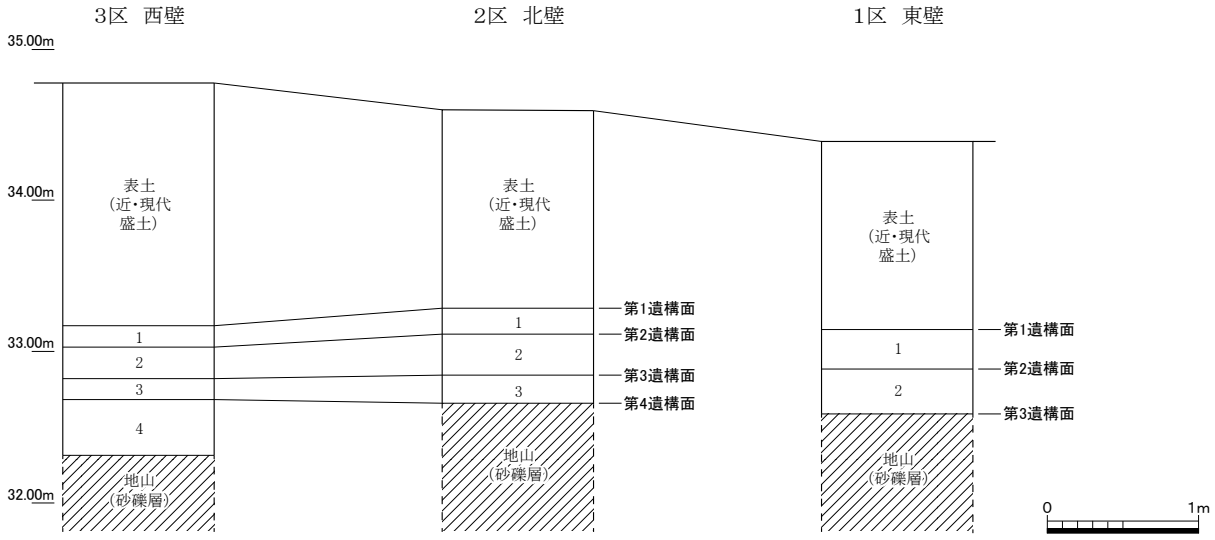
１区

現地表面は標高 34.40 ～ 34.84 mと西高東低の様相を呈している。地表面から 1.24 ～ 1.70 m下まで掘り下げた、標高 33.20 mの地点から調査を行った。

近現代の攪乱及び近世の火災処理土坑を除去した、しまりのある黒褐色シルトを基調とした整地土（１）上で、土坑 001 や溝 002 等を確認した。その 0.24 m下ではしまりのある黄灰色シルトの整地土（２）を確認した。この整地土の層厚は 0.28 mである。この面では目立った遺構は確認できなかった。この整地土を下げた面が地山面である砂礫層である。この面上で、粘土敷きの性格不明遺構 085 や集石遺構 288 などを確認している。

２・３区

現地表面は標高 34.46 ～ 34.85 mと西高東低の様相を呈している。地表面から近現代の攪乱及び近世の火災処理土坑を除去した、地表面から 1.25 ～ 1.70 m下まで掘り下げた標高 33.14 ～ 33.18 mの地点から調査を行った。灰黄褐色泥砂を基調とした２区の整地（１）上ではピットを確認した。褐灰色シルトを基調とした３区の整地（１）面では 17 世紀～ 18 世紀の鍛冶関連遺構が集中している。上記の整地土を除去した 0.14 ～ 0.18 m下で、暗オリーブ褐色シルト～黒褐色砂泥の整地土



3区西壁
1 10YR5/1褐灰色シルト しまりあり、粗砂含む
2 2.5Y3/1黒褐色砂泥 しまり強い
3 2.5Y6/1黄灰色シルト しまり・粘性強い
4 5Y6/2灰オリーブ色シルト しまり強い

2区北壁
1 10YR4/2灰黄褐色泥砂 しまり強い
2 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト
3 2.5Y2/2黒褐色シルト しまりあり、粗砂まじる

1区東壁
1 2.5Y3/1黒褐色シルト しまり強い、粗砂・炭化物・粘土入る
2 2.5Y4/1黄灰色シルト しまりあり

図７　調査区壁面柱状図（1/50）

（2）を検出した。この整地土上では土器溜や土坑を検出した。さらに 0.2 ～ 0.28 mで 2 区では黒褐色シルト、3 区では黄灰色シルトの整地土（3）を確認した。層厚は 0.13 ～ 0.16 mである。この整地土上で土坑や礎石建物を確認している。上記の整地土を除去した状態で、砂礫を中心とした地山面を確認した。Cグリッド西側からEグリッドにかけて、地山面である砂礫層が 0.1 ～ 0.4 m落ち込んでおり、砂礫層上にしまりの強い灰オリーブ色シルト層で整地（4）されている。この地山面上では井戸や柱穴を中心に多くの遺構が集中して掘りこまれている。

（2）遺構概要

今回の調査では 4 面分の調査を行い、平安時代から江戸時代までの遺構を検出した。(表 2)

現場進行中及び整理段階で改めて年代や遺構の重複についての見直しを行ったが、本文中では現場で図面を作成した状況に準拠して報告し、第 5 章のまとめで整理した状態を報告する。

第 1 遺構面では 17 世紀～ 18 世紀を中心とした鍛冶関連遺構を検出した。第 2 遺構面では土坑や土器溜を検出した。第 3 遺構面では、礎石建物や土坑、粘土敷の性格不明遺構 085 等を確認した。第 4 遺構面では、多くの柱穴や井戸を 2 基検出した。

以下、調査した遺構面順に主要遺構を詳述する。

表２　遺構概要表

遺構面	遺構	主要遺構
第 1 遺構面	ピット、土坑、井戸	鍛冶関連遺構（井戸029、土坑030・158・160・166・167・170・171） 井戸047
第 2 遺構面	ピット、土坑、土器溜	土器溜048 土坑184
第 3 遺構面	ピット、土坑、溝、礎石建物、性格不明遺構	溝051 ピット287・289 土器溜052、集石遺構288 土坑146・286 性格不明遺構085 礎石建物 1 （柱穴053・087・056・057・079・078）
第 4 遺構面	ピット、土坑、井戸	井戸124

（3）第 1 遺構面の遺構

第 1 遺構面は近・現代の盛土や攪乱を除去して検出した遺構面である。部分的に、攪乱によって大きく壊されていたが、1 区では東側のみ遺構面を確認した。また、2 区ではピットを中心に土坑と井戸を検出、反転した 3 区では一転して整地層にも焼土や炭化物が多く入り、鍛冶関連遺構が集中する様子を確認した。

井戸 047（図 14）

C 2 グリッドで検出した井戸で、長軸長 1.3 m、短軸長 1.2m の円形である。深さは 1.2m で地山の砂礫層を大きく掘りぬいている。当初は最上層の砂礫層が攪乱と類似していたため攪乱扱いとしていたが、埋土を観察した結果、遺構として掘削を行った。

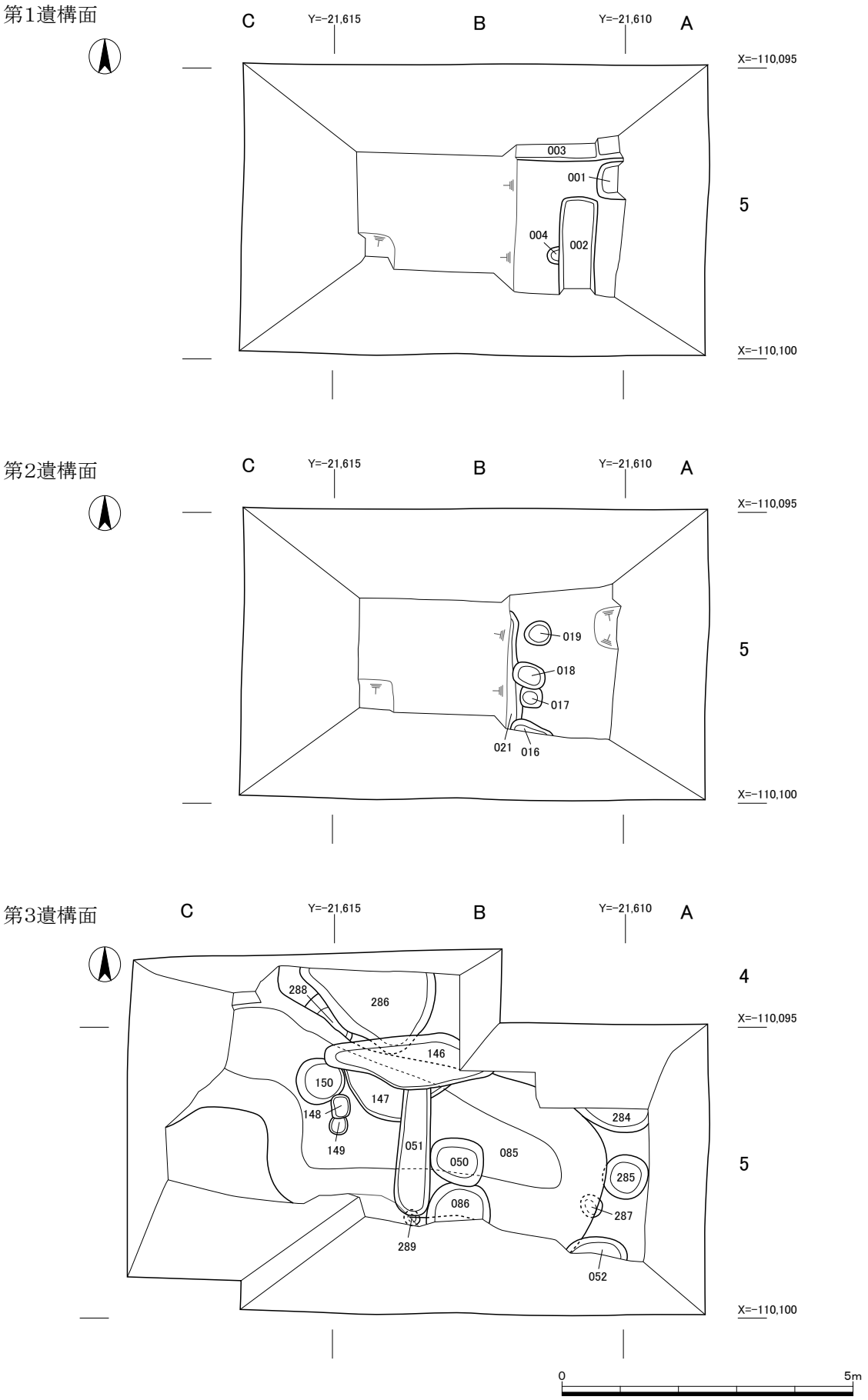


図８　１区　第１・２・３遺構面全体図（1/100）

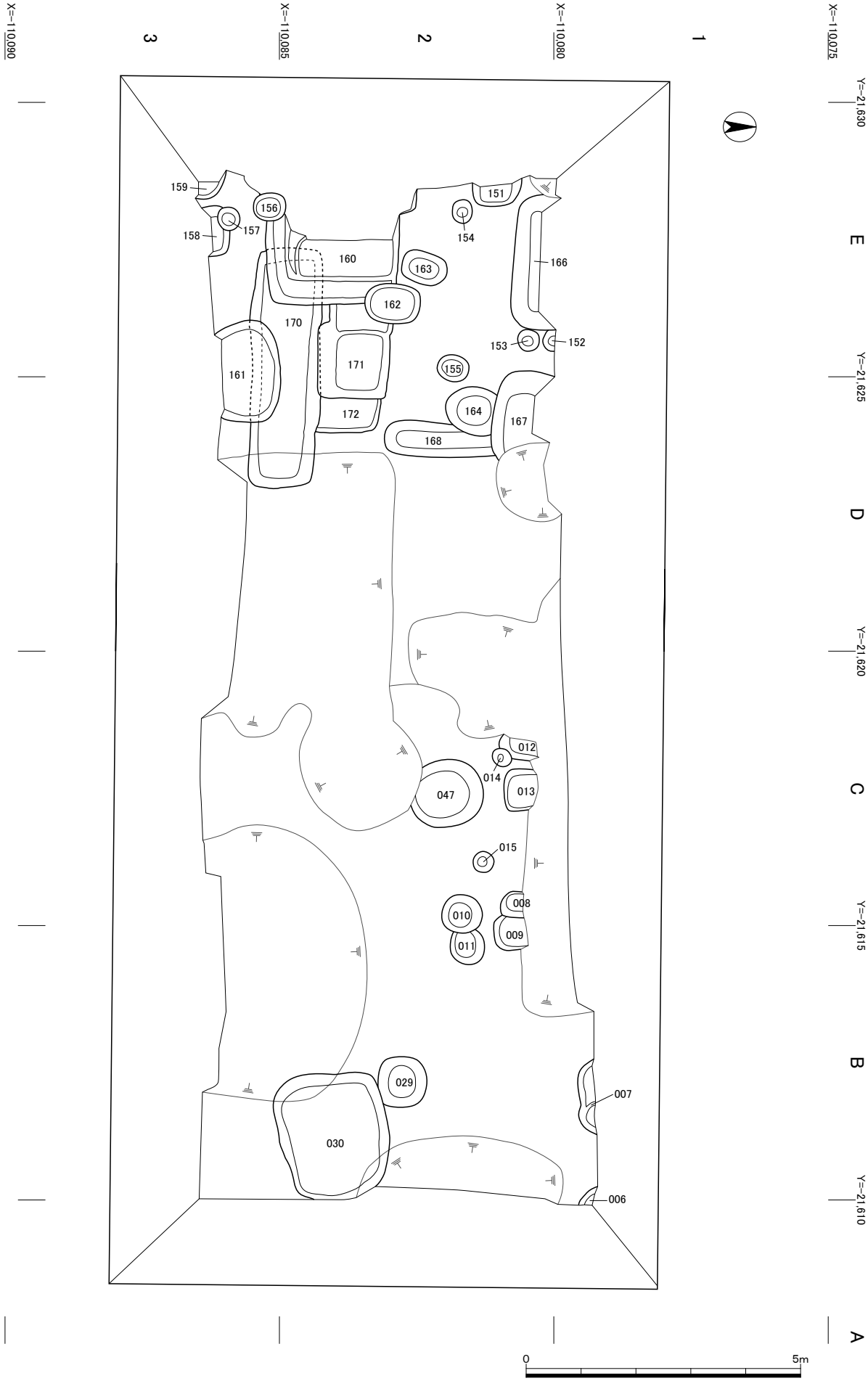


図９　２・３区　第１遺構面全体図（1/100）

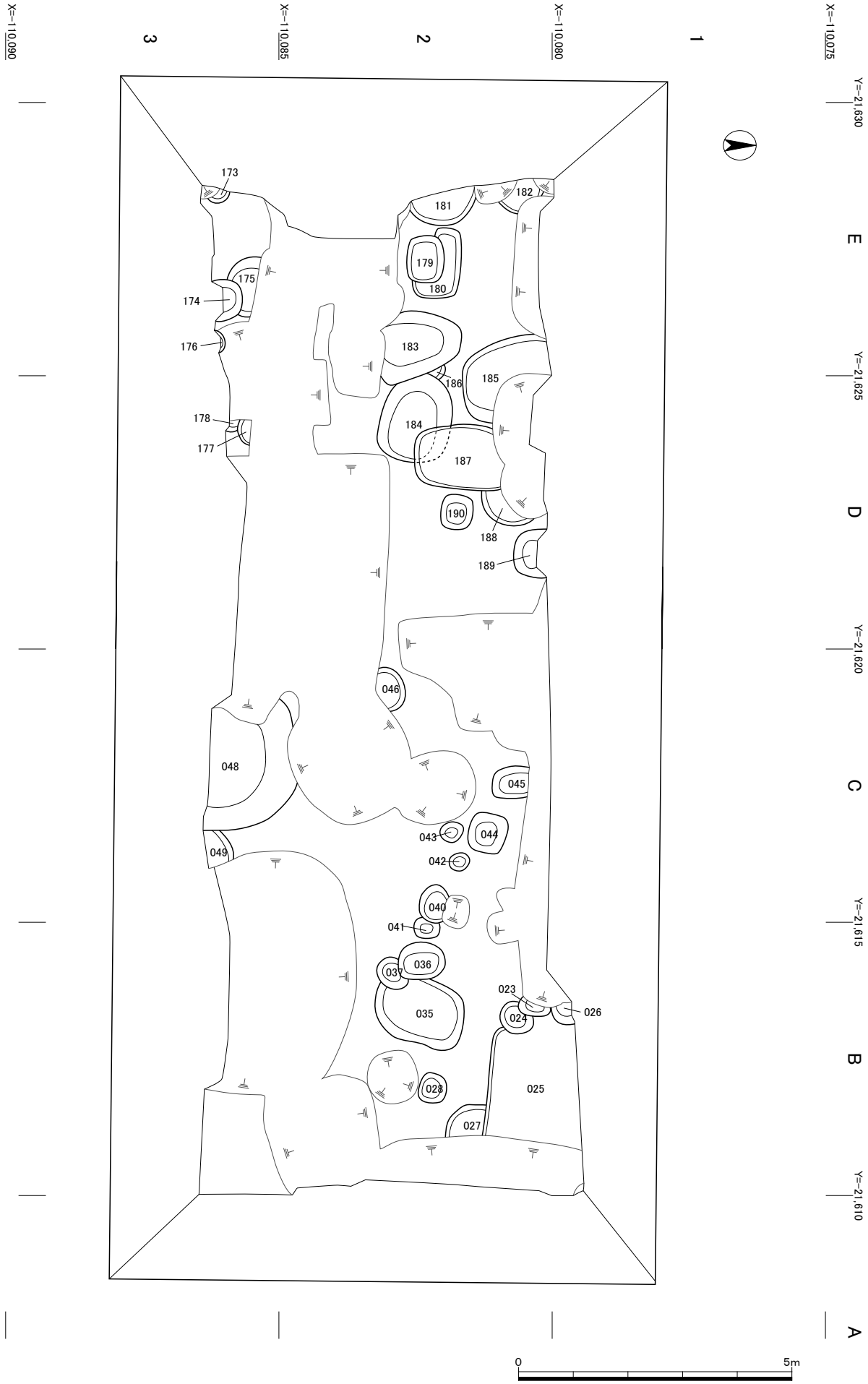


図 10　２・３区　第２遺構面全体図（1/100）

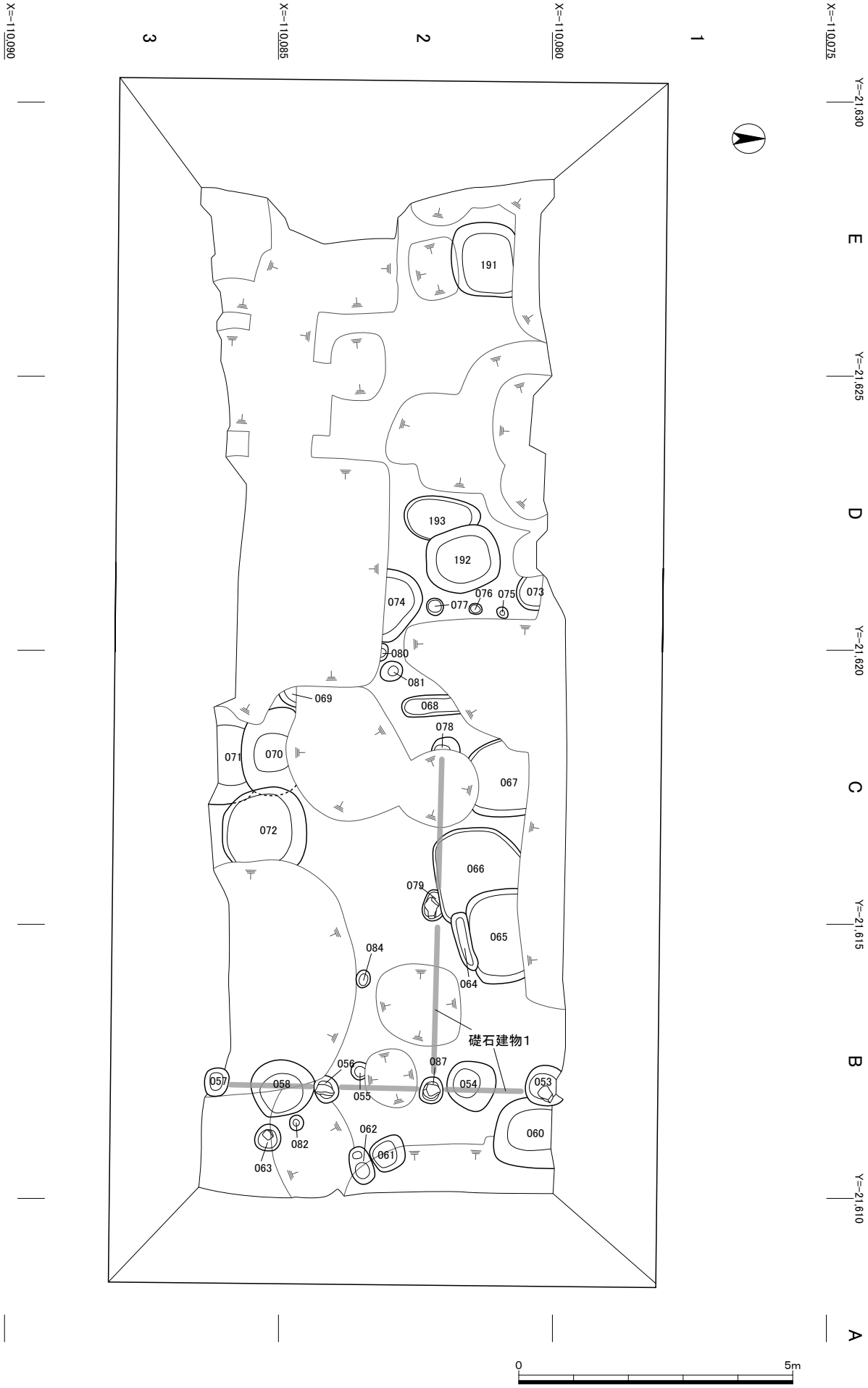


図 11　２・３区　第３遺構面全体図（1/100）

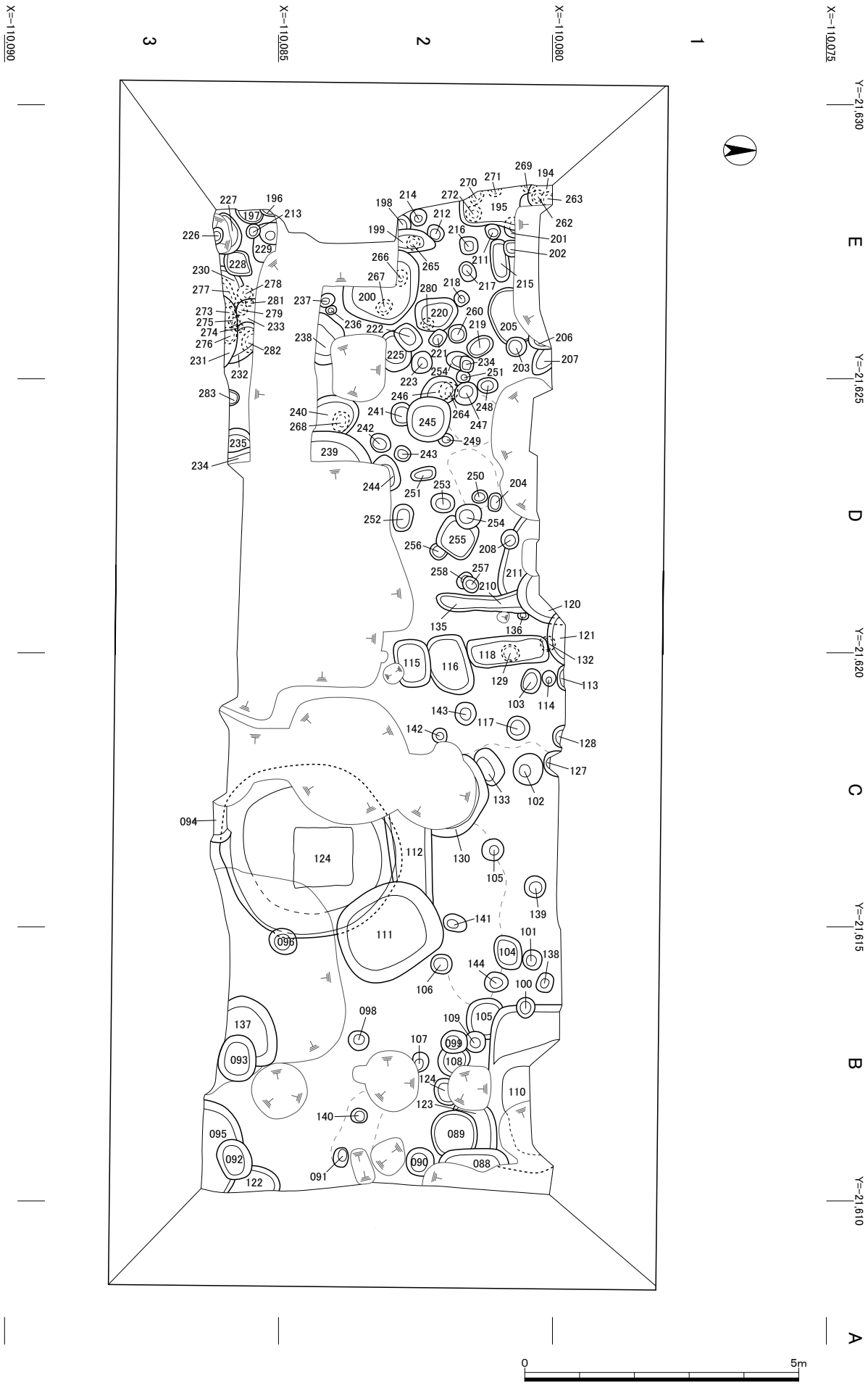


図 12　2・3 区　第 4 遺構面全体図（1/100）

出土した遺物は土師器皿、焼締陶器、青白磁、須恵器、瓦質土器、瓦である。

井戸 029（図 14）

Ｂ２グリッドで検出した井戸で、一辺 0.9m の隅丸方形である。深さは 1.0 ｍで地山の砂礫層を大きく掘りぬいている。

埋土は３層に分かれており、上層は暗赤褐色土、中層は灰褐色砂泥、下層は橙色砂質土で特に上層に焼土を多く含む。

出土した遺物は土師質土器、染付、青磁、白磁、瓦、鉄製品（釘）、砥石、壁土、鞴羽口である。

土坑 030（図 14）

Ｂ２・３グリッドで検出した土坑で、残存長軸長 2.3 ｍ、短軸長 2.0 ｍの隅丸方形である。深さは全体に 0.2 ～ 0.35 ｍである。底面中央付近に、長軸長 0.7 ｍ、短軸長 0.6 ｍ、深さ 0.15 ～ 0.2 ｍ程の楕円形の凹みを持つ。なお、底面全体が硬化している。

図 13　土坑 030 出土青銅製品

埋土は大きく３層に分かれる。上層は赤黒色砂泥と暗赤褐色砂泥の互層、中層は黒褐色砂泥、下層は褐灰色泥砂で、上層は一面焼土である。埋土中から網状の青銅製品が出土している（図 13）。

出土した遺物は土師器皿、焼締陶器、施釉陶器、染付、須恵器、瓦、土人形、鉄製品（釘）、青銅製品である。

遺構埋土及び出土した遺物から、井戸 029、土坑 030 は同時期の鍛冶関連遺構と考えられる。

土坑 158（図 14）

Ｅ３グリッドで検出した土坑で、長軸長 0.9 ｍ、残存短軸長 0.5 ｍの隅丸方形である。深さは 1.0 ｍで、埋土は３層で、上層は鉄滓や焼土を多く含む極暗赤褐色土、中層は褐灰色シルト、下層は黒褐色粘土である。

出土した遺物は土師器皿、白磁、青磁、磁器、焙烙鍋、鞴羽口、鉄滓である。

土坑 166（図 14）

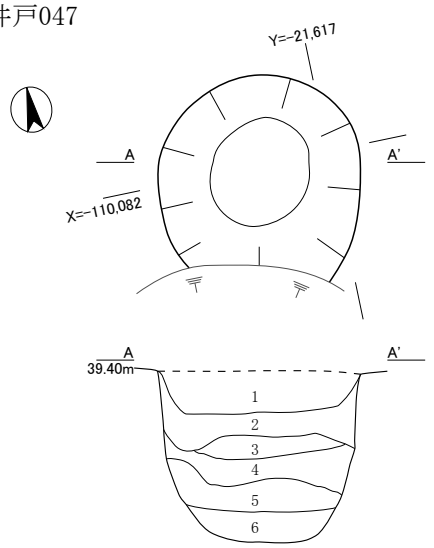
Ｅ１・２グリッドで検出した土坑で、長軸長 2.5 ｍ、残存短軸長 0.7 ｍの隅丸方形である。深さは 1.3 ｍで、埋土は５層に分かれており、最下層に黒褐色粘土、その上に焼土、褐灰色砂泥、暗赤褐色の鉄滓と鞴羽口が多く入る層、上層に灰色系粘土でパッキングしている。

出土した遺物は土師器皿、焼締陶器、染付、須恵器、砥石、鞴羽口、鉄製品（釘）、鉄滓である。特筆事項として、鞴の羽口の出土量はテンバコ２箱分、鉄滓は８箱分に及ぶ。

土坑 167（図９）

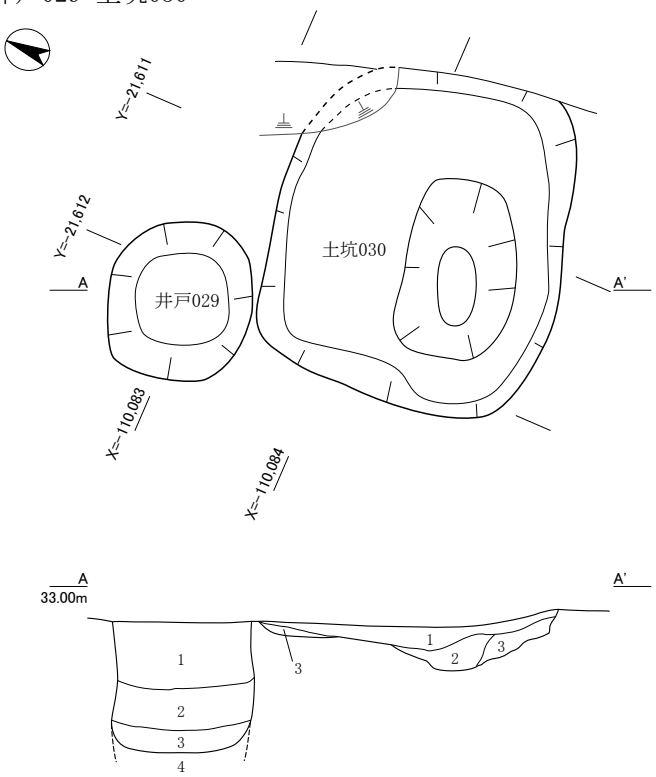
Ｄ１・２グリッドで検出した土坑で、残存長軸長 1.5 ｍ、残存短軸長 1.0 ｍの隅丸方形である。

井戸047



1 10YR7/1灰白色砂礫
2 10YR4/1褐灰色砂泥
3 10YR4/2灰黄褐色泥砂 しまり弱い
4 10YR5/2灰黄褐色砂泥 しまり・粘性あり
5 10YR4/1褐灰色粘質土 しまり・粘性あり、5～10cm大の礫含む
6 10YR5/1褐灰色粘土

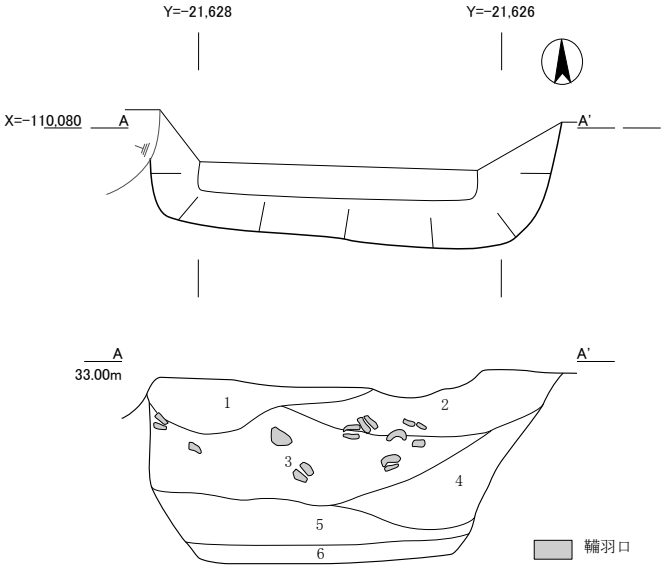
井戸029・土坑030



井戸029
1 5YR3/2暗赤褐色土 焼土・瓦片多く含む
2 7.5YR5/2灰褐色砂泥 しまりあり
3 7.5Y5/1褐灰色泥砂 しまり弱い
4 7.5YR6/6橙色砂質土

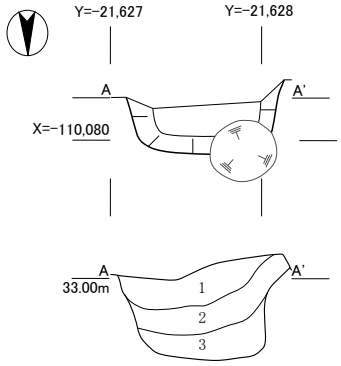
土坑030
1 2.5YR2/1赤黒色砂泥 しまり強い・
2.5YR3/6暗赤褐色砂泥(焼土) しまり弱い の互層
2 5YR3/1黒褐色砂泥 しまり・粘性あり
3 5YR6/1褐灰色泥砂 しまりあり

土坑166



1 7.5YR5/1褐灰色粘土 しまり・粘性強い
2 5YR2/1黒褐色シルト・5YR4/3にぶい赤褐色粘質土の互層
しまり強い
3 5YR3/6暗赤褐色粘土・5YR2/1黒褐色粘土の互層
鉄滓・鞴羽口を多量に含む
4 5YR4/1～5/1褐灰色シルトの互層 しまり強い
5 5YR2/2黒褐色シルト～2/3極暗赤褐色土(焼土)
しまり・粘性ややあり
6 10YR3/1黒褐色粘土 しまり・粘性強い

土坑158



1 5YR2/4極暗赤褐色シルト しまり強い 焼土・鉄滓多く含む
2 7.5YR4/1褐灰色シルト しまり・粘性強い
3 5YR2/1黒褐色粘土 しまりあり 焼土含む

0 1m

図 14 個別遺構図１ 井戸 047・029、土坑 030・158・166（1/50）

深さは 1.1 mで、埋土は大きく２層に分かれており、上層は暗青灰色粘質土で緑青が沈着する。下層は木枠の内部で、黄灰色シルトと黒褐色粘土の互層である。青銅製品を制作していたとみられる。鉄滓は出土していないが、一部溶けた青銅の塊が出土している。

埋土中に木枠の痕跡が残っており、残存長軸長 1.15 m、残存短軸長 0.9 mの長方形であったと考えられる。

出土した遺物は、土師器皿、焼締陶器、施釉陶器、染付、磁器、鞴羽口である。

土坑 160（図 15）

Ｅ２・３グリッドで検出した土坑で、長軸長 2.5 m、残存短軸長 2.0 mの隅丸方形である。深さは 1.8 mで、埋土は大きく４層に分けられる。最下層はしまりの強い明褐色砂礫で、鉄分が沈着して硬化する様子が確認できた。下層は黒褐色粘土、中層は鉄滓や鞴羽口を多く含む褐色土と褐灰色土の互層、上層は黒色砂泥と黄灰色粘土の互層で下部にしまりの強い灰色シルトが緩やかに湾曲する様相がみられる。

出土した遺物は、土師器皿、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁、染付、青磁、磁器、焙烙鍋、土鈴、瓦質土器（瓦灯）、土人形、瓦、るつぼ、鞴羽口、鉄滓と多岐にわたる。一部古手の須恵器が混入する。

土坑 170（図 15）

Ｄ・Ｅ２・３グリッドで検出した土坑で、長軸長 4.4 m、短軸長 1.3 mの長方形である。深さは 1.06 mで、埋土は大きく３層に分けられる。下層はしまりの強い黄灰色粘土で鉄分が多く沈着し、硬化する。中層は木枠内に褐灰色粘土とにぶい黄橙色シルトの互層である。上層は暗褐色砂泥と褐灰色砂泥である。緑青が沈着し、やや青みがかる箇所がみられる。

埋土中に木枠の痕跡が残っており、長軸長 4.0 m、短軸長 0.9 mの長方形であったと考えられる。

出土した遺物は、土師器皿、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁、染付、青磁、須恵器、緑釉陶器、瓦質土器、瓦、鞴羽口である。

埋土に緑青が沈着する様子や、鉄滓が出土していない状況から見ても、土坑 167 と類似する。

土坑 171（図 15）

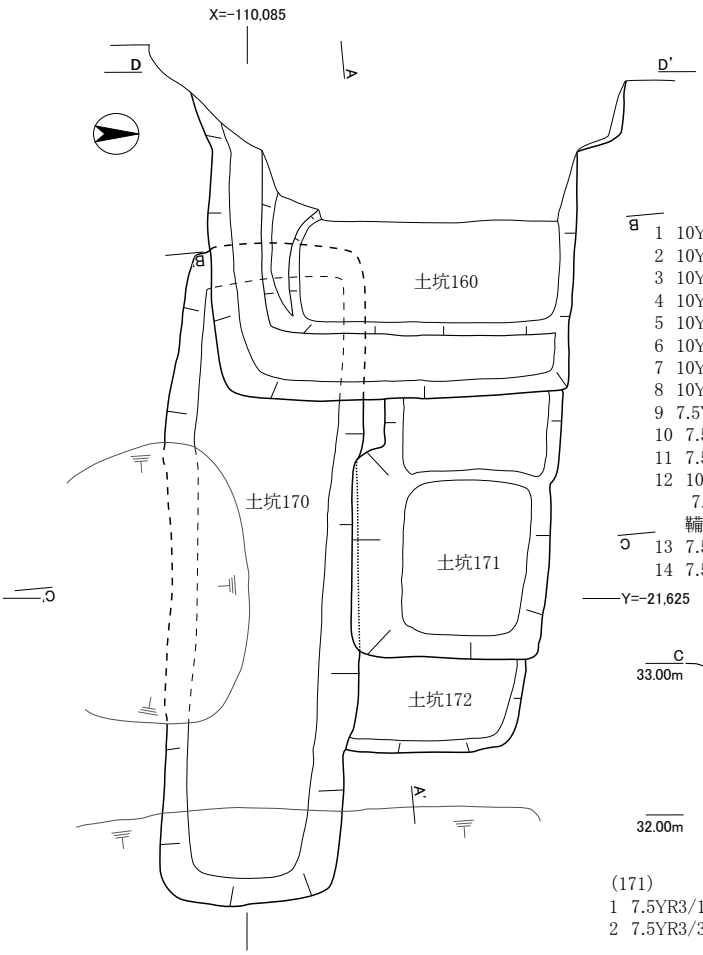
Ｅ２グリッドで検出した土坑で、残存長軸長 1.7 m、短軸長 1.3 mの隅丸方形である。深さは 0.96 mで、埋土はしまり・粘性のある黒褐色砂泥～褐灰色砂泥である。

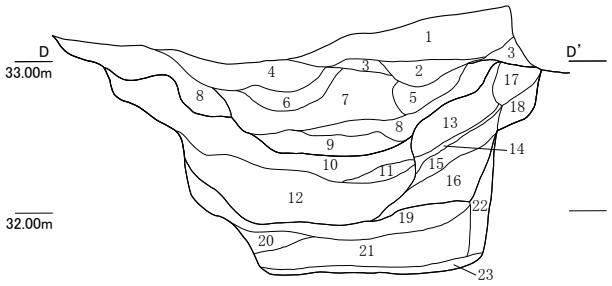
出土した遺物は、土師器皿、焼締陶器、施釉陶器、染付、瓦質土器、土人形、瓦、るつぼ、鞴羽口である。

（４）第２遺構面の遺構

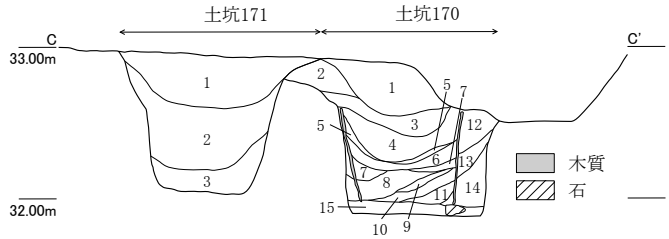
第２遺構面はピットや土坑が中心で、遺構数は他の遺構面と比べると少ない。

土坑160・170・171・172



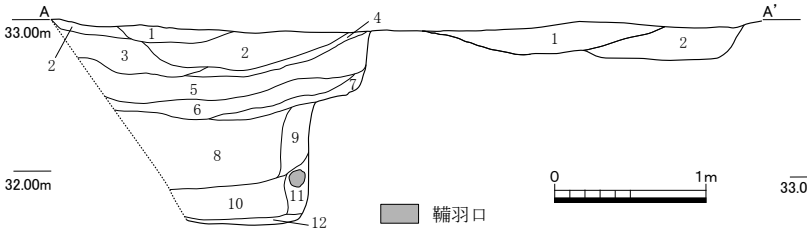


1 10YR3/2黒褐色砂泥
2 10YR8/1灰白色泥砂
3 10YR3/3暗褐色砂泥 灰白色粘土入る
4 10YR2/1黒色砂泥 炭入る
5 10YR4/1褐灰色シルト
6 10YR4/1褐灰色シルト しまり強い、青銅まじる
7 10YR2/1黒色砂泥と6/1黄灰色粘土の互層
8 10YR5/1褐灰色シルト
9 7.5YR8/1灰白色粘土 しまり強い
10 7.5YR5/2灰褐色シルト
11 7.5YR5/1褐灰色シルト しまりあり
12 10YR3/1黒褐色シルトと
7.5YR3/3暗褐色泥砂の互層
鞴羽口入る
13 7.5YR3/2〜3/4暗褐色土と褐色土の互層
14 7.5YR5/1褐灰色シルト しまり・粘性強い
15 7.5YR3/3暗褐色シルト
しまりあり、鉄分含む
16 7.5YR4/4褐色砂泥 鉄分多く含む
17 7.5YR4/3褐色砂泥 粗砂多く入る
鉄滓・鞴羽口多く入る
18 7.5YR6/1褐灰色シルト しまりあり
鞴羽口入る
19 10YR4/1褐灰色砂泥 しまり・粘性強い
20 7.5YR7/1明褐灰色シルト
21 7.5YR2/2黒褐色砂泥 しまり・粘性あり
22 7.5YR6/2灰褐色砂泥 しまり・粘性強い
23 7.5YR5/6明褐色砂礫 しなりかなり強い
(硬化面、鉄分多く沈着)



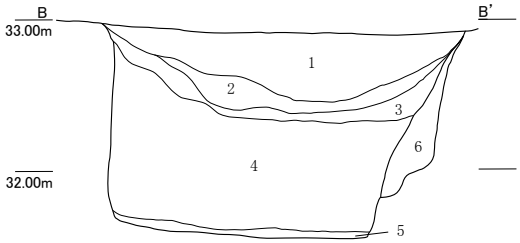
(171)
1 7.5YR3/1黒褐色砂泥 しまり・粘性あり
2 7.5YR3/3暗褐色泥砂 しまり・粘性あり
鉄滓含む
3 7.5YR6/1褐灰色砂泥 しまり強い

(170)
1 7.5YR3/3暗褐色砂泥 しまり強い
2 7.5YR4/3褐色シルト しまりあり
3 10YR5/1褐灰色砂泥 しまり・粘性あり
4 N5/0灰色粘土 しまり・粘性強い
5 10YR7/2にぶい黄橙色シルト しまり・粘性強い
6 10YR6/1褐灰色粘土 しまりあり
7 10YR5/2灰黄褐色シルト しまり・粘性あり
8 10YR4/2灰黄褐色粘土 灰色粘土まじる
9 10YR7/2にぶい黄橙色シルト しまり・粘性強い
10 10YR5/1褐灰色砂泥 しまり強い
11 10YR7/2にぶい黄橙色シルト しまり・粘性強い
12 N4/0灰色粘土 しまり・粘性強い
13 10YR6/1褐灰色泥砂 しまりあり、粘性強い
14 2.5Y3/1黒褐色粘土 しまり・粘性強い
15 2.5Y4/1黄灰色粘土 しまり強い、鉄分多く含む



(160)
1 7.5YR2/3極暗褐色砂泥(焼土) しまりあり
2 10YR3/1黒褐色砂泥・褐色泥砂互層
3 10YR2/1黒色砂泥 しまりあり(炭入る)
4 10YR4/1褐灰色砂泥 しまりあり、青銅入る
5 10YR2/1黒色砂泥と2.5Y6/1黄灰色粘土の互層
6 7.5YR8/1灰白色粘土 しまり強い(炉か？)
7 10YR6/1褐灰色シルト しまり・粘性強い
8 10YR3/1黒褐色シルトと7.5YR3/3暗褐色泥砂の互層
9 7.5YR3/2黒褐色土 しまりあり
10 7.5YR2/2黒褐色粘土 しまりあり
11 7.5YR3/3暗褐色土 しまり強い、鉄滓・鞴羽口多く入る
12 7.5YR5/6明褐色砂礫 しまりかなり強い、床面硬化する

(171)
1 7.5YR3/1黒褐色砂泥 しまり・粘性あり
(172)
2 7.5YR1.7/1黒色粘土 しまり・粘性強い



(160)
1 10YR3/1黒褐色砂泥・褐色泥砂互層
2 7.5YR8/1灰白色粘土 しまり強い(炉か？)
3 10YR6/1褐灰色シルト しまり・粘性強い
4 7.5YR2/2黒褐色砂泥 鉄滓多く含む、しまりあり
5 7.5YR5/6明褐色砂礫 しまりかなり強い、床面硬化する
(170)
6 10YR4/1褐灰色砂泥 しまりあり、粘性強い

図 15 個別遺構図２ 土坑 160・170・171・172（1/50）

土坑 183（図 10）

Ｅ２グリッドで検出した土坑で、残存長軸長 1.5 m、短軸長 1.3 mの楕円形で、深さは 0.3 mである。埋土は黒褐色シルトである。

出土した遺物は、土師器皿、須恵器、軒平瓦、瓦、銅銭である。

土坑 184（図 10）

Ｄ２グリッドで検出した土坑で、残存長軸長 1.6 m、短軸長 1.2 mの隅丸方形である。深さは 0.2 mで、埋土は黒褐色砂泥である。

出土した遺物は、土師器皿、焼締陶器、白磁、白色土器、石製品（硯）である。

土坑 185（図 10）

Ｅ１・２グリッドで検出した土坑で、残存長軸長 1.6 m、短軸長 1.5 mの隅丸方形である。深さは 0.35 mで、埋土はしまりの強い黒褐色砂泥である。

出土した遺物は、土師器皿、焼締陶器、施釉陶器、白磁、青磁、瓦質土器、瓦、石製品（石鍋）である。

土器溜 048（図 16）

Ｃ２・３グリッドで検出した土坑で、残存長軸長 2.2 m、残存短軸長 1.7 mの円形である。深さは 0.3 mで、埋土は２層に分かれており、上層は黒褐色粘質土、下層は褐灰色粘土である。全体に割れた状態の遺物が多量に入る。

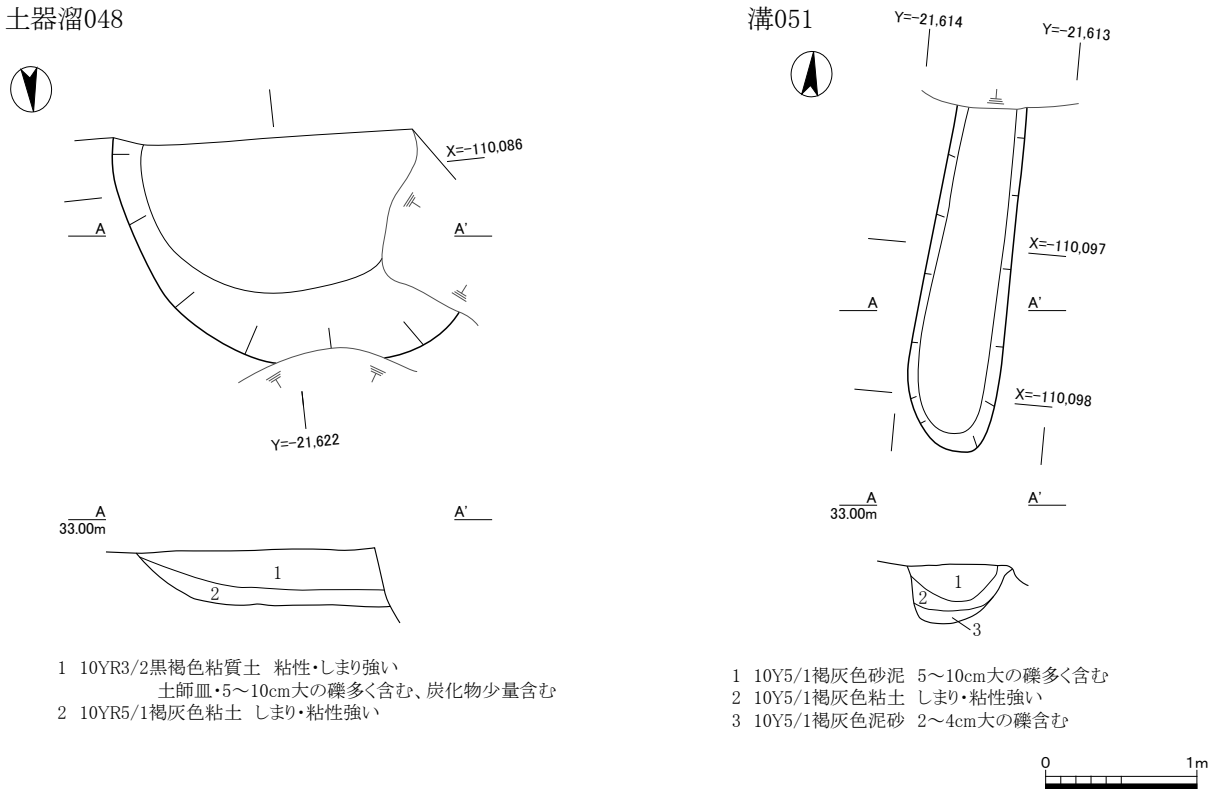


図 16　個別遺構図３　土器溜 048、溝 051（1/50）

出土した遺物は、土師器皿、焼締陶器、施釉陶器、白磁、青白磁、須恵器、瓦質土器、瓦である。

（５）第３遺構面の遺構

第３遺構面は、１区では性格不明遺構 085 が広がっており、周囲に土坑やピットが展開する。２・３区ではピットや土坑、礎石建物を確認した。

溝 051（図 16）

Ｂ５グリッドで検出した、幅 0.55 m、長軸長 2.3 mの溝である。深さは 0.38 mで、断面形はＵ字形である。上層は火災処理土坑で大きく壊されており、本来は第３遺構面の遺構ではない可能性がある。埋土はしまり・粘性のある褐灰色砂泥である。

出土した遺物は、土師器皿、焼締陶器、施釉陶器、白磁、須恵器、瓦質土器、瓦である。

土器溜 052（図８）

Ａ・Ｂ５グリッドで検出した土坑で、長軸長 1.0 m、残存短軸長 0.3 mの楕円形である。深さは 0.2 mで、埋土はしまりの強い暗灰黄色砂泥である。

出土した遺物は土師器皿のみである。

土坑 146（図８）

Ｂ５グリッドで検出した土坑で、残存長軸長 3.0 m、短軸長 0.9 mの不整形な楕円形である。深さは 0.3 ～ 0.5 mで、埋土はしまり・粘性の強い黒色粘土である。

出土した遺物は、土師器皿、焼締陶器、瓦質土器（羽釜）である。

ピット 287（図８）

Ｂ５グリッドで検出したピットで、長軸長 0.4 m、短軸長 0.3 mの円形である。深さは 0.25 mで、埋土は粘性の強い浅黄色粘土である。

出土した遺物は、土師器皿と白磁の小片である。

ピット 289（図８）

Ｂ５グリッドで検出したピットで、直径 0.3 mの円形である。深さは 0.1 mで、埋土は粘性の強い浅黄色粘土である。

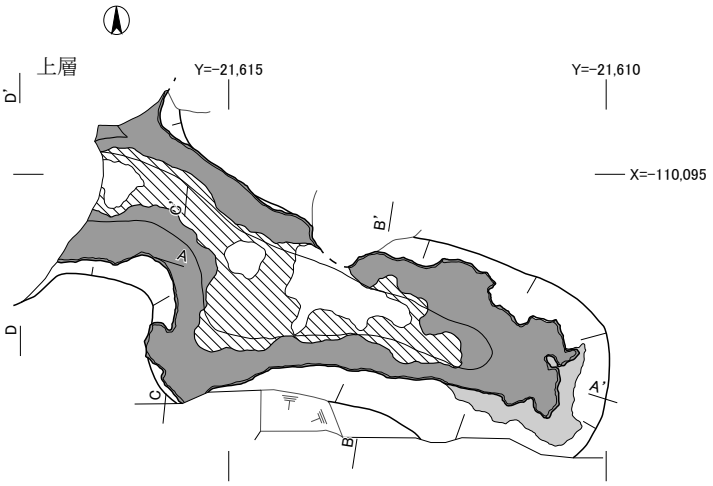
出土した遺物は土師器皿と青白磁の小片である。

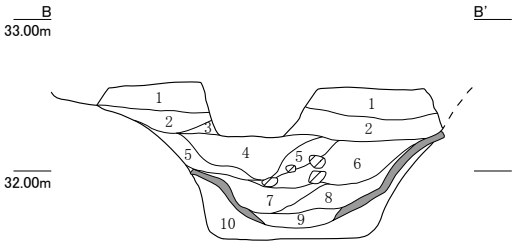
土坑 286（図８）

Ｂ・Ｃ４グリッドで検出した土坑で、残存長軸長 2.4 m、残存短軸長 1.6 mの方形である。深さは 0.3 mで、埋土は黒褐色粘土である。

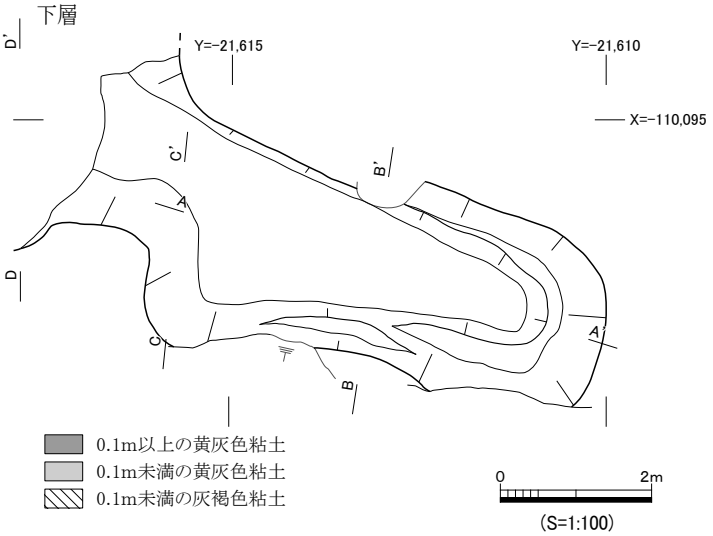
出土した遺物は、土師器皿、焼締陶器、輸入陶磁、白磁、須恵器、白色土器、灰釉陶器、瓦質土

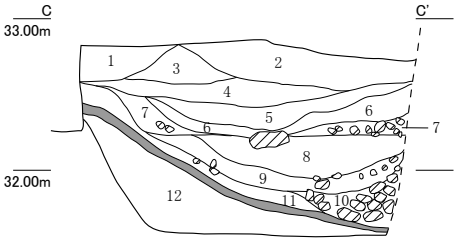
性格不明遺構085



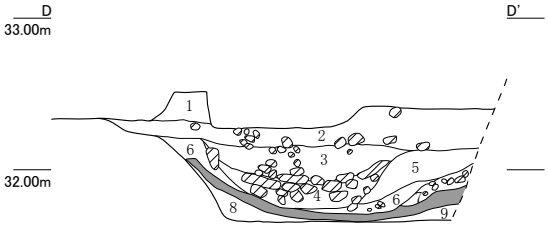


1 2.5Y6/2灰黄色シルト しまり強い
2 2.5Y3/1黒褐色シルト しまりあり
3 7.5YR2/3極暗褐色シルト 焼土含む
4 10YR3/1黒褐色粘質土 しまり・粘性あり
5 2.5Y2/1黒色シルト しまりあり
6 10YR3/1黒褐色シルト しまり強い
7 2.5Y3/1黒褐色粘質土 しまり・粘性強い、拳大の礫含む
8 5Y3/2オリーブ黒色砂泥 しまりあり、粘性強い、粗砂・拳大の礫多く含む
9 5Y4/3暗オリーブ色泥砂 しまり・粘性あり、粗砂多く含む
10 5Y2/2オリーブ黒色粘土 しまり・粘性強い

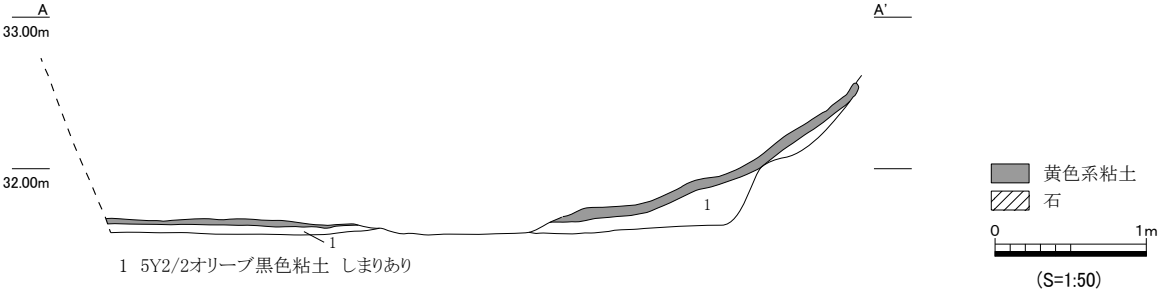




1 10YR2/1黒色砂泥 しまりあり
2 10YR2/1黒色砂泥 しまり・粘性あり
3 10YR3/1黒褐色シルト しまり・粘性あり
4 2.5Y4/2暗灰黄色シルト しまり強い
5 2.5Y3/1黒褐色粘質土 しまりあり
6 2.5Y2/1黒色粘質土 しまり・粘性強い
7 2.5Y3/2黒褐色シルト しまり・粘性強い、5cm大の礫多く含む
8 2.5Y3/1黒褐色シルト しまりあり、粗砂含む
9 2.5Y2/1黒色シルト しまり・粘性強い
10 2.5Y3/1黒褐色粘質土 しまり・粘性強い、10～40cm大の石多く含む
11 5Y3/1オリーブ黒色粘質土 しまり・粘性強い、粗砂・小礫多く含む
12 5Y2/2オリーブ黒色粘土 しまり・粘性強い



1 10YR5/1褐灰色シルト しまり強い
2 10YR3/1黒褐色シルト しまり・粘性強い、拳大の礫多く含む
3 2.5Y4/1黄灰色シルト しまりあり
4 2.5Y3/1黒褐色粘質土 しまり・粘性強い、10～40cm大の石多く含む
5 2.5Y3/2黒褐色粘質土 しまり強い
6 5Y3/1オリーブ黒色粘質土 しまり・粘性強い、粗砂・小礫多く含む
7 5Y2/1黒色粘質土 しまり強い、4～10cm大の礫多く含む
8 5Y2/1黒色粘土 しまり・粘性強い
9 5Y2/2オリーブ黒色粘土 しまりあり



1 5Y2/2オリーブ黒色粘土 しまりあり

図 17　個別遺構図４　性格不明遺構 085（1/100、1/50）

器、瓦である。

集石遺構 288（図８）

Ｂ・Ｃ４グリッドで検出した土坑で、残存長軸長 0.9 m、残存短軸長 0.5 mの楕円形である。深さは 0.2 mで、埋土は黒褐色シルトである。拳大の礫が多く入る。

出土した遺物は、土師器皿と白磁である。

性格不明遺構 085（図 17）

Ｂ・Ｃ４～５グリッドで検出した遺構である。形状は不整形で、検出した幅 2.4 m、検出した長軸長は 8.0 m以上である。深さは１m を超える。上層を火災処理土坑等の攪乱や他の遺構に壊されており、本来の形状は不明である。軸方向はおよそ N-113°-E である。

地山の砂礫層を大きく掘りこみ、裏込めにしまりの強い黒色系粘土をいれて、形状を整えた上に、厚さおよそ 0.1 mの黄色系粘土が一面に貼られている様子を確認した。東側と南側には集中的に裏込め土が盛られていた。遺構の東端は確認できているが、西端はさらに調査区外へと延びており、西側と北側にそれぞれ分岐して延伸しているため、この先は不明である。

粘土より上層の埋土は大きく３層に分けられ、当初埋没時の下層、作り替え期（転用期）の中層、完全に埋めて整地した時期の上層である。

出土した遺物は、土師器皿、焼締陶器、輸入陶磁、白磁（四耳壺含む）、青磁、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦質土器（三脚付羽釜等）、瓦、軒平瓦、軒丸瓦、瓦器、鉄製品（釘）と多岐にわたる。

礎石建物１（柱穴 053-087-056-057-079-078）（図 11）

Ｂ・Ｃ１～３グリッドで検出した柱穴群である。柱穴は、凡そ長軸長 0.4 m、短軸長 0.3m の円形で、深さは 0.2 ～ 0.3 mである。礎石は 0.3 ～ 0.4 m大で、上面が平らになるように据え付けている。周囲を攪乱等で大きく壊されており、建物の全景は不明である。

出土した遺物は、土師器皿である。いずれも小片で、図示することはできなかった。

（６）第４遺構面の遺構

第４遺構面はピットを中心に、土坑、溝、井戸等を確認した。特にＣグリッド西側からＥグリッド全体にシルト質整地土で厚く整地されており、整地上にピットを多く確認した。明確に並ぶ様子を確認できなかったため、建物の復元には至っていない。

井戸 110（図 12）

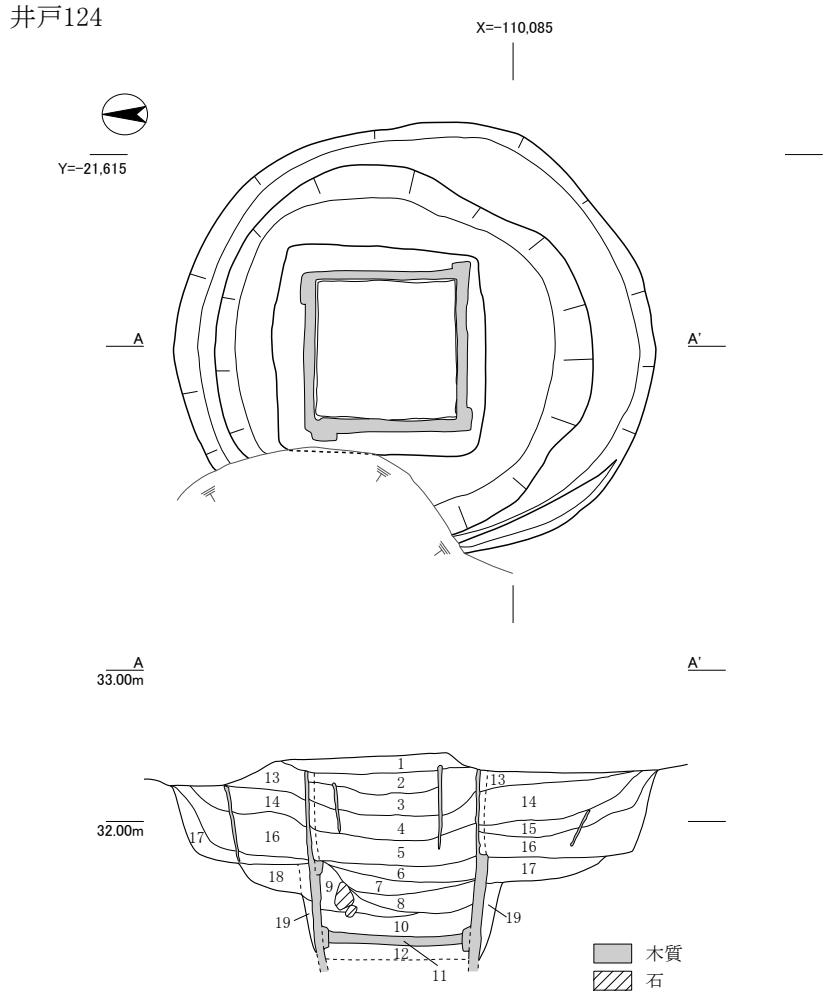
Ｂ１・２グリッドで検出した井戸で、長軸長 3.0m 以上、残存短軸長 1.4m の隅丸方形である。深さは 0.6 mで地山の砂礫層を大きく掘りぬいている。埋土はしまり・粘性の強い黒褐色砂泥である。

出土した遺物は、土師器皿、焼締陶器、瓦である。

井戸 124（図 18）

Ｃ２・３グリッドで検出した井戸で、長軸長 3.2m、残存短軸長 2.9m の円形である。深さは 1.4m で地山の砂礫層を大きく掘りぬいている。腐食しているが木枠がわずかに残存しており、枠の厚さは 0.08 mで、掘方は一辺 1.4 m、枠は長軸長 1.2 m、短軸長 1.1 mである。

出土した遺物は、土師器皿、輸入陶磁、青磁、白磁、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦器、瓦、軒丸瓦、軒平瓦である。



1 10YR4/1褐灰色泥砂 しまりあり、5～10cm大の礫含む
2 2.5Y3/1黒褐色シルト しまり・粘性強い
3 2.5Y4/1黄灰色シルト しまり強い
4 2.5Y5/1黄灰色シルト しまり・粘性強い
5 2.5Y2/1黒色泥砂 しまり強い
6 2.5Y4/1黄灰色砂泥 しまりあり
7 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 しまり・粘性あり
8 2.5Y3/1黒褐色粘土 しまり・粘性強い、木質含む
9 2.5Y3/2黒褐色砂礫 2～6cm大の礫多く含む
10 2.5Y4/1黄灰色泥砂 1～2cm大の礫多く含む
11 2.5Y3/2黒褐色土 木質が腐食したものか
12 2.5Y7/6明黄褐色砂質土 しまり強い
13 5Y6/1灰色砂泥 しまり強い
14 5Y3/1オリーブ黒色砂泥 しまり・粘性あり
15 5Y7/1灰白色砂泥 しまり・粘性強い
16 5Y5/1灰色泥砂 しまりあり
17 5Y6/1灰色砂泥 しまり・粘性あり
18 5Y2/1黒色砂泥 しまり・粘性強い
19 5Y4/1灰色泥砂 しまりあり、1～4cm大の礫多く含む

0 1m

図 18 個別遺構図５ 井戸 124（1/50）

4.遺物

今回の調査では、整理コンテナにして39箱の遺物が出土した。出土した遺物は、土師器皿、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、染付磁器、白磁、青磁、青白磁、須恵器、白色土器、磁器、灰釉陶器、緑釉陶器、山茶碗、瓦器、瓦質土器、土製品、石製品、金属製品、青銅製品、瓦、鍛冶関連遺物（鞴羽口、鉄滓、坩堝）など多岐にわたる。時代は平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代のものがある。

出土遺物の年代の傾向をみると、鍛冶関連遺構を中心とする江戸時代が41%、柱穴群と性格不明遺構を中心とする平安時代中～後期が38%、室町時代の土器溜等から13%、鎌倉時代の井戸等から8%と、遺構の集中度と比例する。

表３　遺物概要表

	Aランク	Bランク	Cランク	コンテナ総数
江戸時代	土師器18点、施釉陶器13点、磁器16点、焼締陶器2点、瓦質土器3点、土製品2点、瓦2点、石製品1点、鍛冶関連遺物6点			
室町時代	土師器29点、施釉陶器1点、瓦質土器1点、石製品1点			
鎌倉時代	土師器6点、瓦8点、石製品1点			
平安時代	土師器20点、須恵器7点、灰釉陶器1点、瓦器1点、磁器1点、輸入陶器1点			
	合計141点（10箱）	3箱	27箱	40箱

（1）江戸時代の遺物

井戸029（図19）

１は磁器の手塩皿である。ひし形で、菊の型押しを施す。２は染付の筒碗である。見込みに五弁花文を描き、二重圏線で囲う。体部外面に草花文と圏線を描く。

出土した遺物は京都XII期頃が中心である。

土坑167（図19）

３は土師器の皿である。皿Ｓで、内面の凹線が圏線化する。４は陶器の小碗である。５は焼締陶器の擂鉢である。擂目は５条１単位とする。器体は外傾して直線的に開く。口縁部に浅い片口を有し、口縁部内側に段をもつ。

出土した遺物は京都XI期頃である。

土坑160（図19）

６～10は土師器の皿である。６～８は皿Nrである。小ぶりで、内面全体をナデ仕上げする。外面は全体に未調整（オサエ）である。９は皿Sb、10は皿Ｓである。口縁部外面にヨコナデを施し調整した皿である。10は灯明皿である。11～17は陶器の碗である。11～14は京焼系で、11・12は碗、13・14は平碗である。11は体部外面に山水文を描き、高台内に「清水」の刻印を施す。12は体部外面に山水文を描き、高台内に刻印を施す。13は見込みに鉄絵で山水文を描き、高台

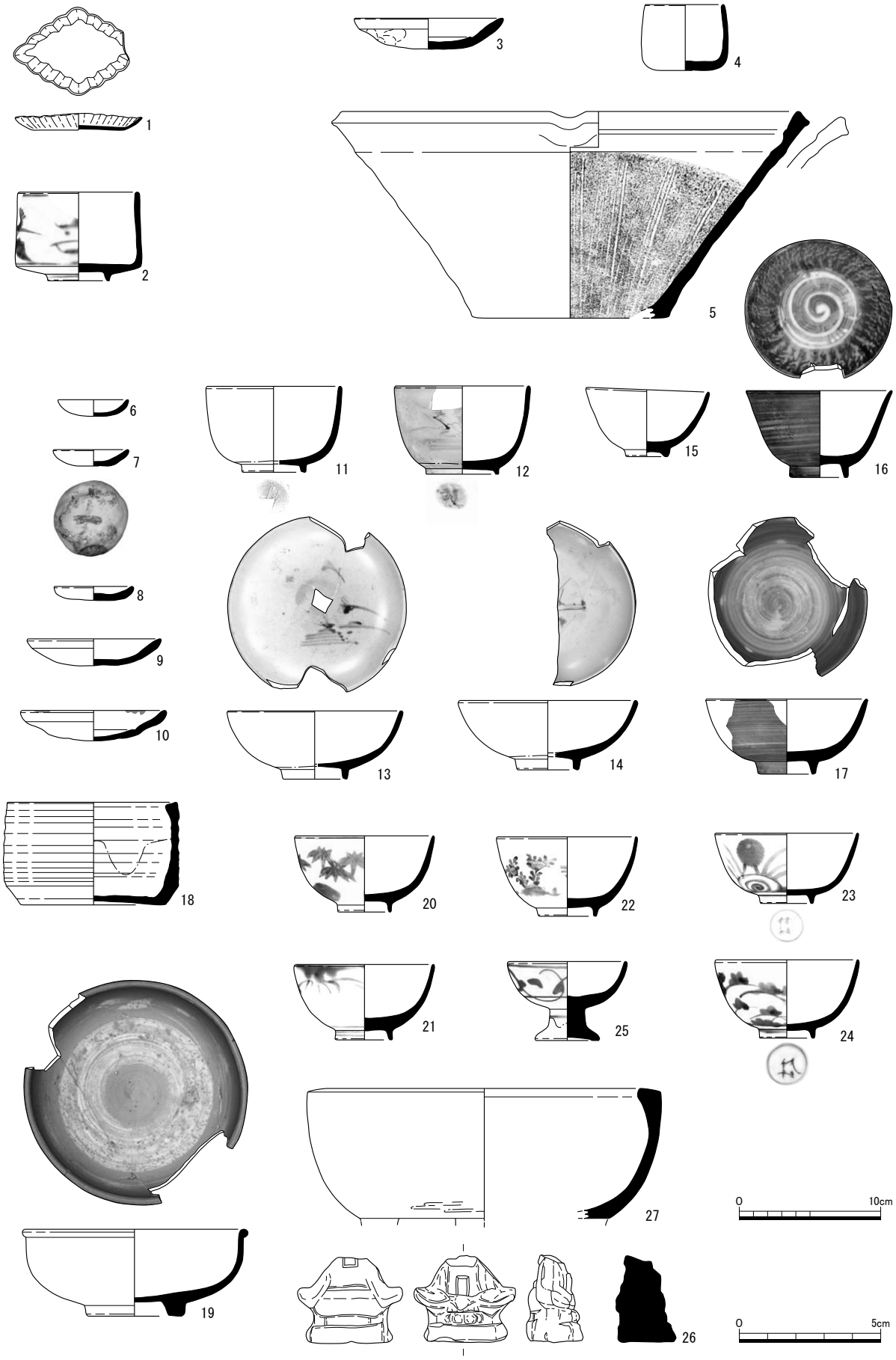


図 19　遺物実測図１（1/4、26 は 1/2）

内に刻印を施す。14 は見込みに山水文を描く。16・17 は九州系の陶器で、刷毛塗を施す。16 は、黒地に白色の化粧土で、体部内面を打ち刷毛目、見込みに渦状の刷毛目文様を描く。17 は赤地に白色の化粧土で、内外面ともに刷毛目文様を施す。18・19 は施釉陶器の鉢である。18 は外面に灰釉をかけた香炉で、口縁は内湾する。19 は底部から体部にかけて緩やかに立ち上がり、口縁端部は外側が玉縁状となる。20 ～ 24 は染付の碗である。20 は体部外面に呉須で笹文を描き、こんにゃく印判による菊丸文を巡らせる。21 は見込みに蛇の目釉剥ぎを施し、体部外面に呉須で草花文と圏線を描く。22 は体部外面に呉須で草花文を描く。23 は体部外面に呉須で草文と圏線を描き、こんにゃく印判による花文を巡らせる。高台内に「大明年製」と描く。24 は体部外面に呉須で草花文を、高台内に「大明年製」と描き、圏線で囲う。25 は染付の仏飯器である。体部外面に蔦文を描く。26 は土製品で、伏見人形である。天神で、笏を持ち、腰には格袋の表現をしていることから衣冠の表現を施す。27 は瓦質土器の鉢である。体部外面にミガキを施し、内面はナデで仕上げる。口縁端部は内側に肥厚する。

出土した遺物は京都Ⅻ期中～新頃である。

土坑 170（図 20）

28 ～ 31 は土師器の皿 S である。体部内面から口縁部外面にかけてヨコナデを施し、口縁端部は丸く収める。内面の立ち上がり部分に凹線状圏線をもつ。32 は陶器の皿である。33 は焼締陶器の擂鉢である。擂目は 5 条 1 単位で、器体は外傾して直線的に立ち上がる。34 は染付磁器の碗である。体部外面に呉須で草花文とみられる文様を描く。35 は瓦質土器の火鉢である。平面形は方形で、体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は内側に肥厚する。

出土した遺物は京都Ⅺ期中～新頃である。

土坑 171（図 20）

36 ～ 42 は土師器の皿である。36 ～ 38 は皿 Nr で口径 5.3 ～ 7.3cm である。39 は皿 Sb で、口径 9.3cm である。40 ～ 42 は皿 S である。40 は口縁端部にススが付着しており、灯明皿とみられる。43 は土製品の人形である。蓑亀で、甲羅には子亀を乗せる。44 は瓦質土器の鉢である。45 は土師質土器の焙烙鍋である。口縁部は外方へ大きく開き、端部は断面方形状を呈する。

46・47 は陶器の碗である。48 ～ 51 は染付の碗である。48 は体部外面に色絵で仁清写しの藤文を描く。49・50 は体部外面に呉須で草花文を描く。51 は体部外面に呉須で圏線と松葉文を描く。52 は染付の皿である。見込みに呉須で人物と山水文を描く。53 は染付の瓶である。胴部に呉須で宝文（蕉葉と隠蓑）を描く。頸部に半円が連続する帯状の文様を描く。54 は染付の仏飯器である。呉須で蔦文を描く。

出土した遺物は京都Ⅺ期新である。

（2）室町時代の遺物

土器溜 048（図 21）

55 ～ 83 は土師器の皿である。皿 Sh（55 ～ 62）、皿 S（63 ～ 71）、皿 N（72 ～ 83）である。

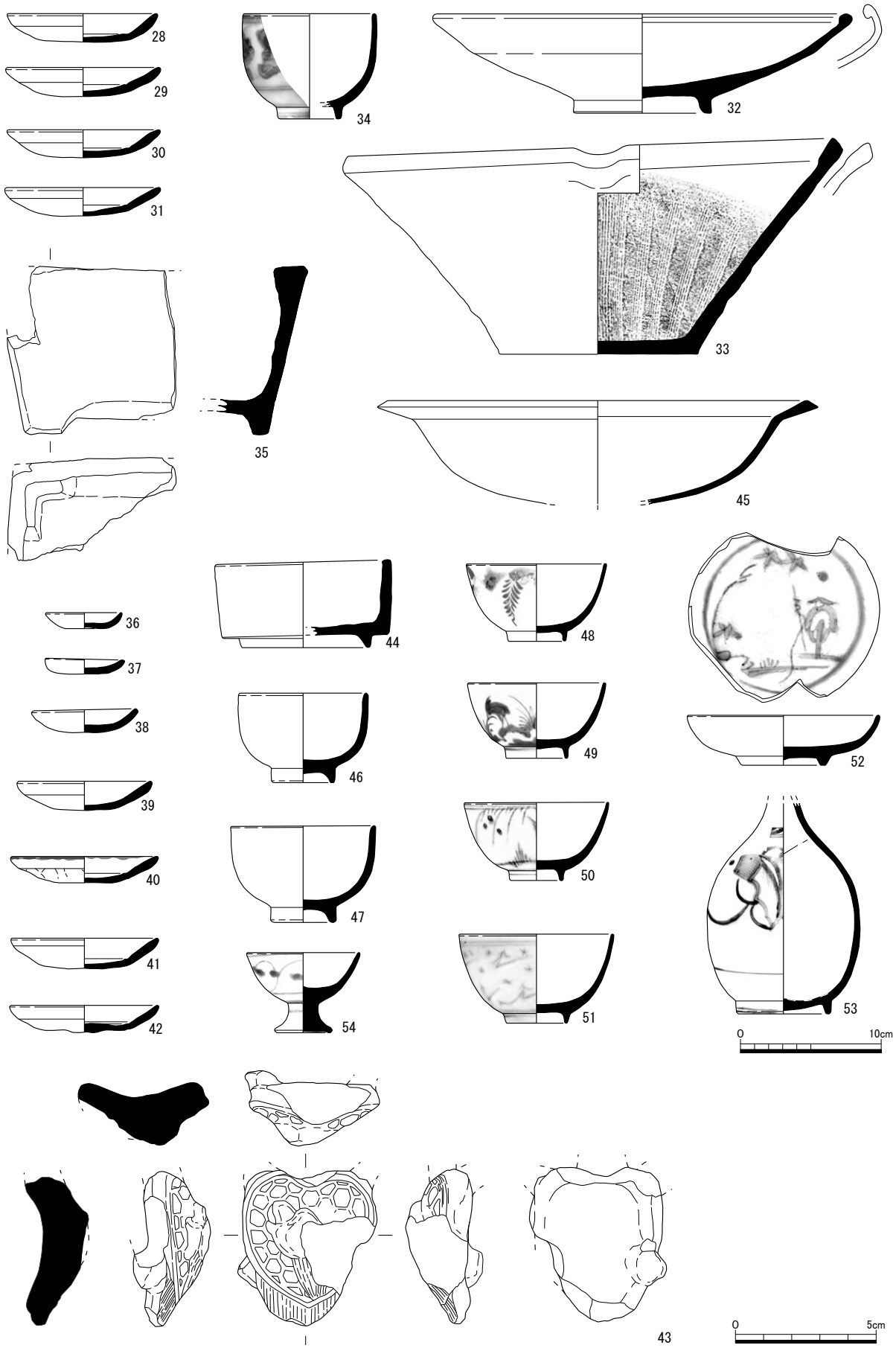


図 20　遺物実測図２（1/4、43 は 1/2）

皿 Sh は口径 7.0cm 前後で、底部中央を押し上げて突出させる。55・57・58 には爪痕が残る。皿 S は口径 8.0cm 前後（63 ～ 66）と、口径 12.0cm 前後（67 ～ 69）と口径 16.3cm（70）、口径 20.6cm（71）の 4 群に分けられる。皿 N は口径 7.0cm 前後（72 ～ 74）、口径 8.6 ～ 8.7cm（75・76）、口径 11.5cm 前後（77 ～ 80）、口径 13cm 前後（81・82）、口径 13.8cm（83）のものがある。84 は瓦質土器の鍋である。胎土は灰色で、外面全体に煤が付着する。体部外面をナデとオサエで仕上げ、内面はナデとハケメで調整を施す。85 は施釉陶器の鉢である。

出土した遺物は京都Ⅷ期新～Ⅸ期古である。

（3）鎌倉時代の遺物

溝 051（図 21）

86 は土師器の皿 Ac である。口径 5.8cm の小型のコースター皿である。

出土した遺物は、京都Ⅶ期中～Ⅷ期古が中心である。

井戸 124（図 21）

土師器の皿 N が出土している。皿 N 小（87・88）は口径 8.0cm 前後、皿 N 大（89 ～ 91）は口径 13.0cm 前後の 2 群に分けられる。

出土した遺物は、京都Ⅵ期中～新頃である。

（4）平安時代の遺物

土坑 183（図 21）

92 は土師器の皿 N である。体部上半から口縁部外面にかけてヨコナデを施し、立ち上がった口縁部が丸みを持つ。

出土した遺物は京都Ⅴ期頃が中心である。

性格不明遺構 085（図 21・22）

93 ～ 107 は土師器の皿である。皿 Ac（93・101）、皿 A（94）、皿 N 小（95・102・105）、皿 N 中（96・103）、皿 N 大（97 ～ 99・104・106・107）、皿 S（100）に分けられる。93 ～ 100 は上層から、101 ～ 104 は中層から、105 ～ 107 は下層から出土した。108 は白磁の碗である。109 は輸入陶器の盤である。内面に黄釉がかかる。110 は瓦器の皿である。111 ～ 117 は須恵器の甕である。111・112 は口縁部端部に凹みを持ち、外面体部に平行叩きを施す。113・114 は外面体部にワッフル状のしっかりした格子叩きを施し、115 ～ 117 は外面体部に細かい格子叩きを施す。118 は灰釉陶器である。

出土した遺物は、およそ、上層が京都Ⅵ期新～Ⅶ期、中層が京都Ⅴ期中～Ⅵ期中、下層が京都Ⅳ期新～Ⅴ期古と年代が分かれる。

土坑 286（図 23）

119 ～ 121 は土師器の皿である。皿 Ac（119）、皿 A（120）、土師器皿 N 小（121）である。

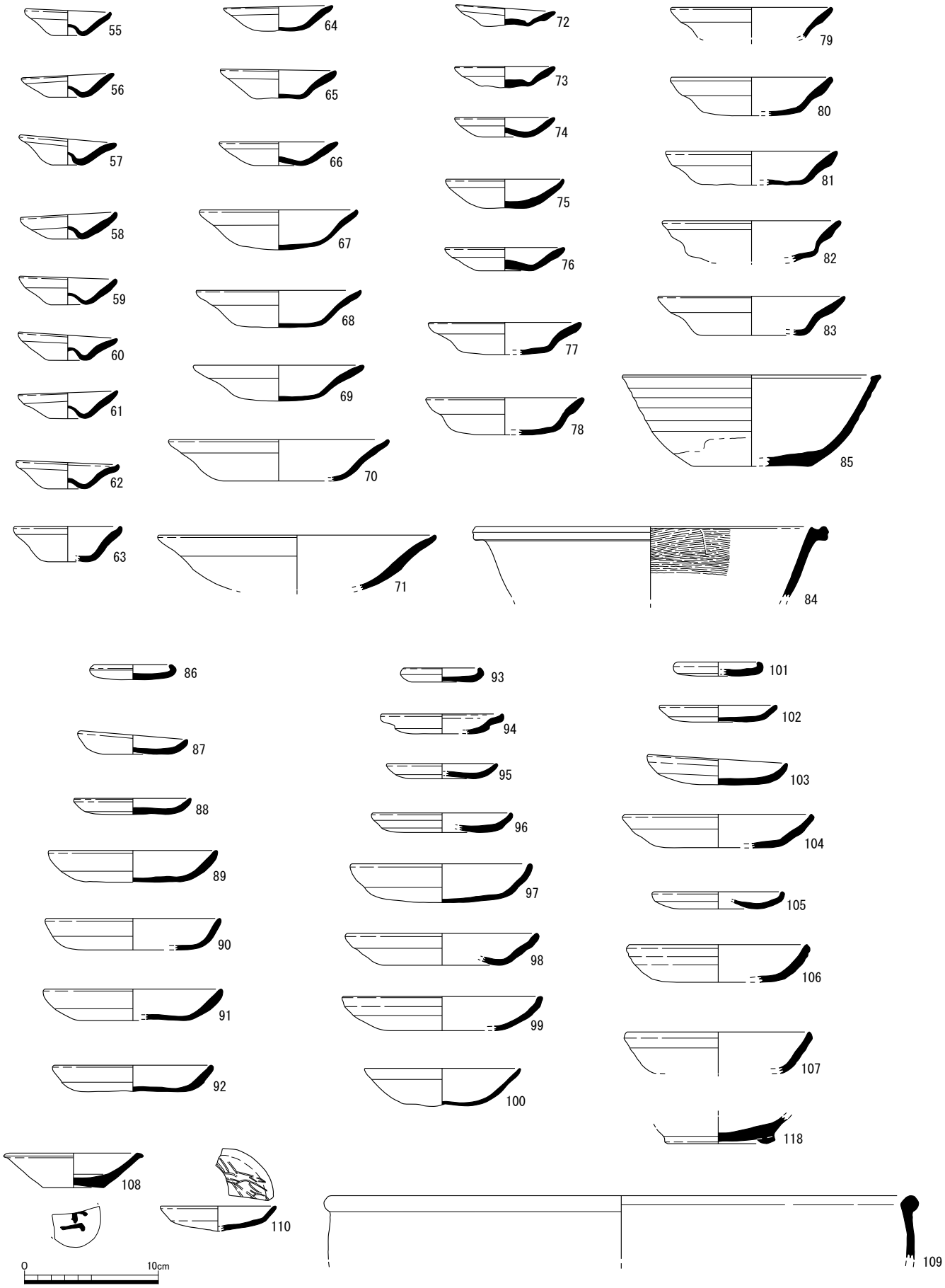


図 21　遺物実測図３（1/4）

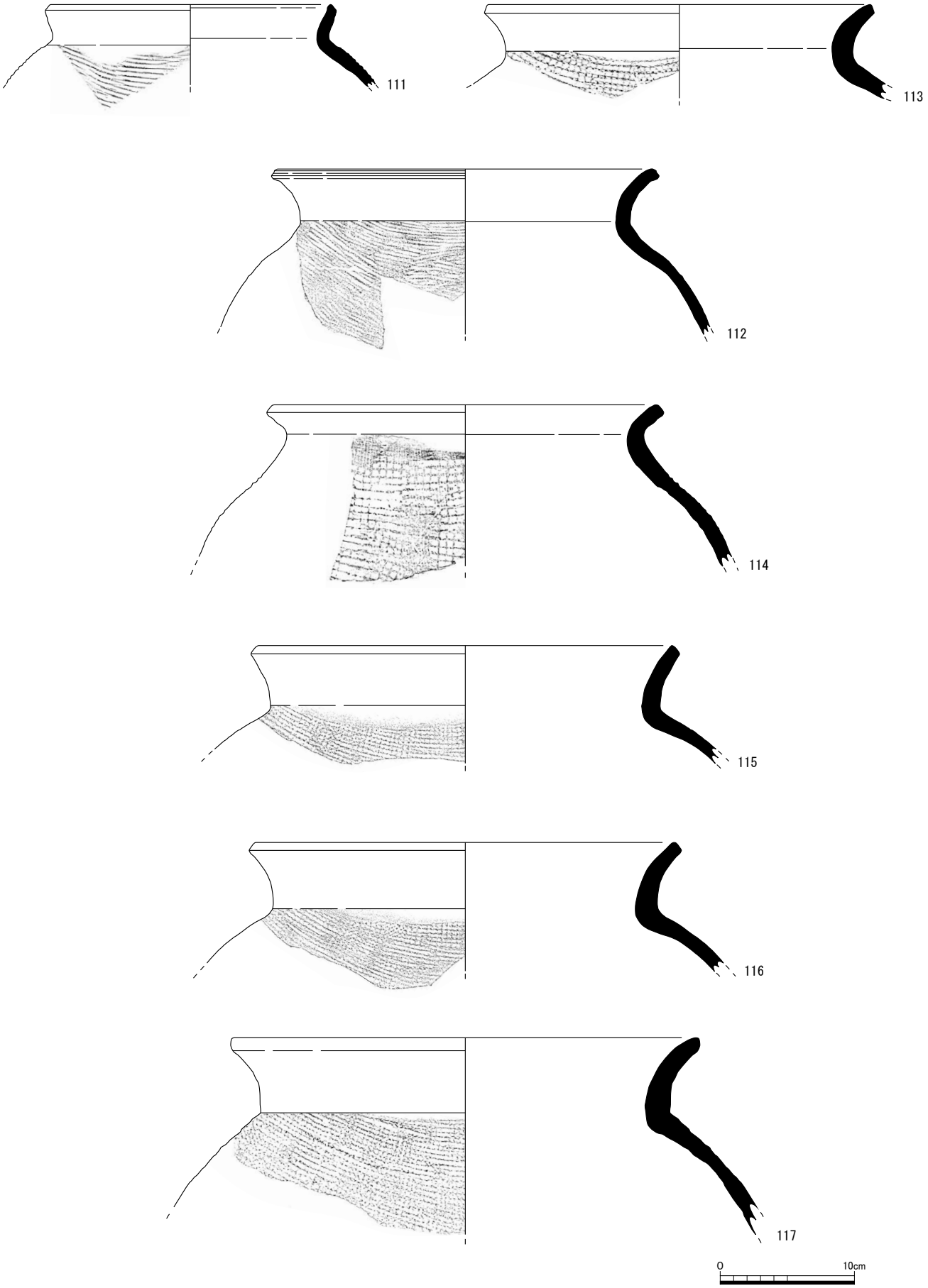


図 22　遺物実測図４（1/4）

出土した遺物は京都Ⅳ～Ⅴ期である。

土器溜 052（図 23）

122 は土師器の皿 N である。体部上端から口縁部の外面はナデによる２段の凹みを持ち、下段の方がやや凹みが強い。口縁部は外反する。

出土した遺物は京都Ⅳ期古～中である。

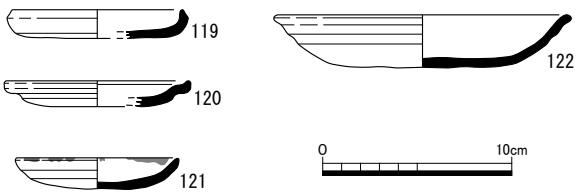


図 23　遺物実測図５（1/4）

（５）石製品（図 24）

石１は砥石である。扁平な仕上砥で鳴滝産と考えられる。頁岩製で、井戸 029 から出土した。

石２は硯である。木瓜形で、全体に大きく欠損しているが、一部海から硯縁の立ち上がりが残る。底面は平らである。粘板岩製である。土坑 184 から出土した。

石３は石鍋である。滑石製である。鍔付型で、体部内面及び外面に数段にわけて丁寧にノミで削った痕跡がみられる。土坑 185 から出土した。

（６）瓦（図 25）

１. 丸瓦

瓦１・瓦２は刻印入の丸瓦である。刻印は「御用 / 京大佛瓦師 / 井上三右衛門」の陰刻が凸部に捺される。「御用」の下に横線があり、全体を四角の線で囲む。

同様の刻印瓦は、白河街区跡や寺町旧域で出土している。瓦１・瓦２はともに井戸 029 から出土している。

２. 軒丸瓦

瓦３は巴文軒丸瓦である。右巻きの巴文で尾が長く、外区に珠文を巡らせる。井戸 124 から出土した。瓦４は複弁蓮華文軒丸瓦である。中房は平坦で、蓮子は中央の１のみ確認できた。蓮弁は七葉もしくは八葉とみられる。性格不明遺構 085 から出土した。

３. 軒平瓦

瓦５は斜格子文軒平瓦である。全体に摩滅するが、凹面に布目が残る。井戸 124 から出土している。瓦６は剣頭文軒平瓦である。平瓦部の凹面に格子状のヘラ刻みを施す。土坑 183 から出土した。瓦７は剣頭文・巴文軒平瓦である。剣頭文と右巻きの三つ巴文を交互に配する。巴は頭がついており、尾は長く伸びる。平瓦部は凹面に布目後ナデ、凸面にタタキで調整する。瓦８は斜格子文軒平瓦である。全体に摩滅が激しく、文様も不明瞭である。平瓦部の凹面に布目がわずかに残る。瓦９は唐草文軒平瓦である。主葉は連続して緩やかに展開し、支葉は大きく巻き込む。山城産とみられる。瓦 10 は唐草文軒平瓦である。瓦当は折曲技法で作られており、唐草文は主葉は連続して緩やかにのび、支葉も緩やかに巻き込む。瓦７～瓦 10 は性格不明遺構 085 から出土した。

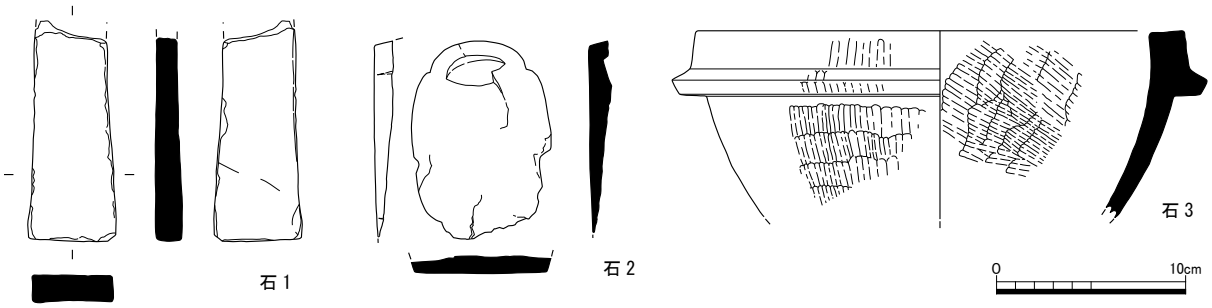


図 24　遺物実測図６（1/4）

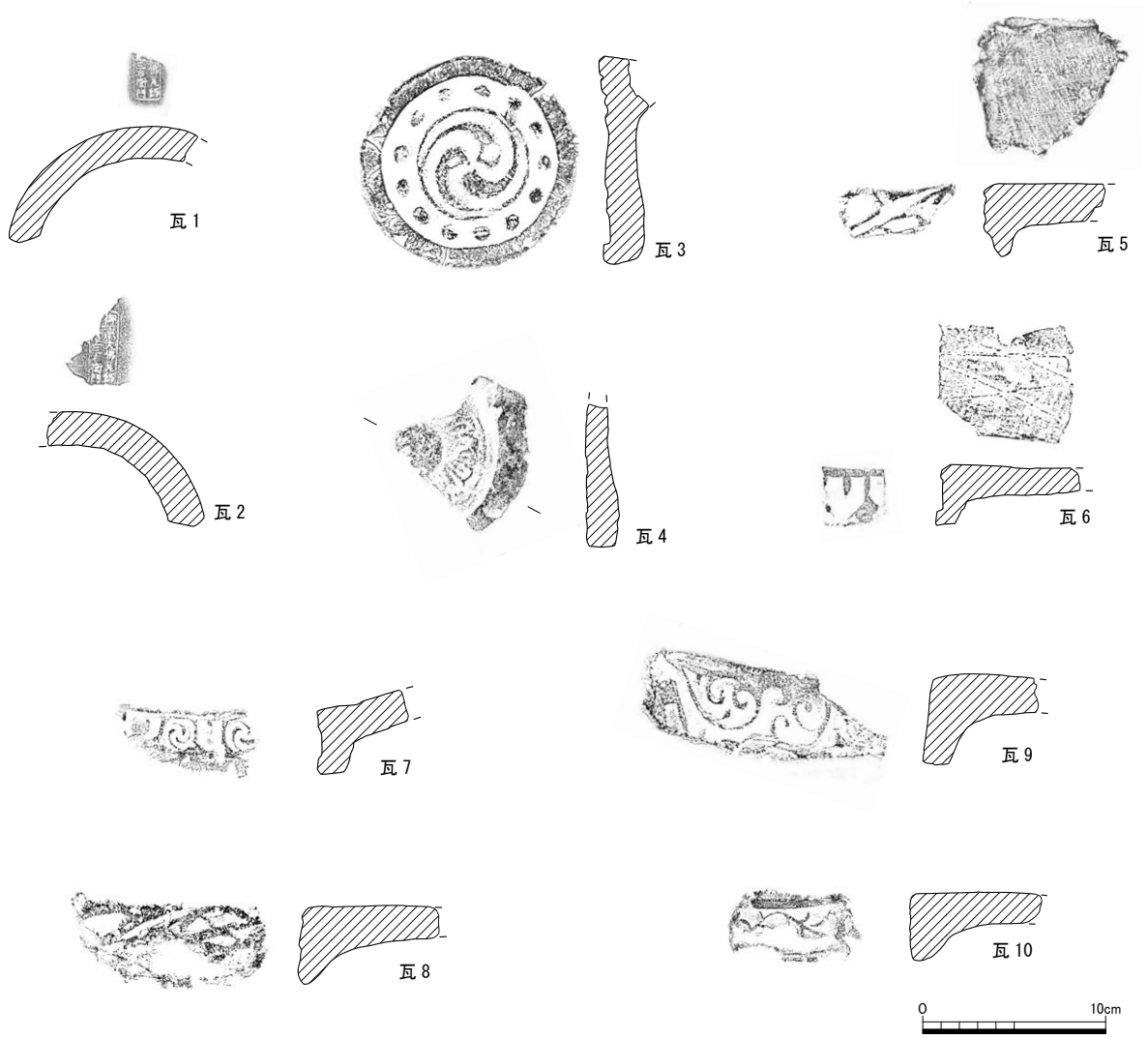


図 25　遺物実測図７（1/4）

（７）鍛冶関連遺物（図 26）

鞴羽口・鉄滓などがある。江戸時代の鍛冶関連遺構からまとまって出土した。

鞴羽口は２種類に分類でき、台形状（鍛１～鍛４・鍛６）のものと筒状（鍛５）のものである。台形状の羽口は、残存長 7.0cm 前後、孔径 2.4 ～ 4.0cm 、外径 8.0cm 前後、厚さ 2.5cm 前後（鍛１・鍛２・鍛６）と、残存長 9.7cm、孔径 3.0 ～ 4.0cm、外径 9.9cm、厚さ 3.3cm（鍛３）、残存長 11.5cm、口径 2.5 ～ 3.3cm、外径 8.8cm、厚さ 2.9cm（鍛４）の概ね 3 種類に分けられる。先端はガラス質化し、赤色の鉄が多く付着する。さらに、鉄滓や炉壁と考えられるスサ混じりの粘土が付着する。孔内面は赤く変色するものの煤の付着等は見られない。土坑 160･166･170 から出土する。筒状の羽口は、残存長 6.5cm、孔径 4.2cm、外径 8.1cm、厚さ 1.8cm（鍛５）である。先端はガラス質化し、緑青が付着する。土坑 167 から出土した。

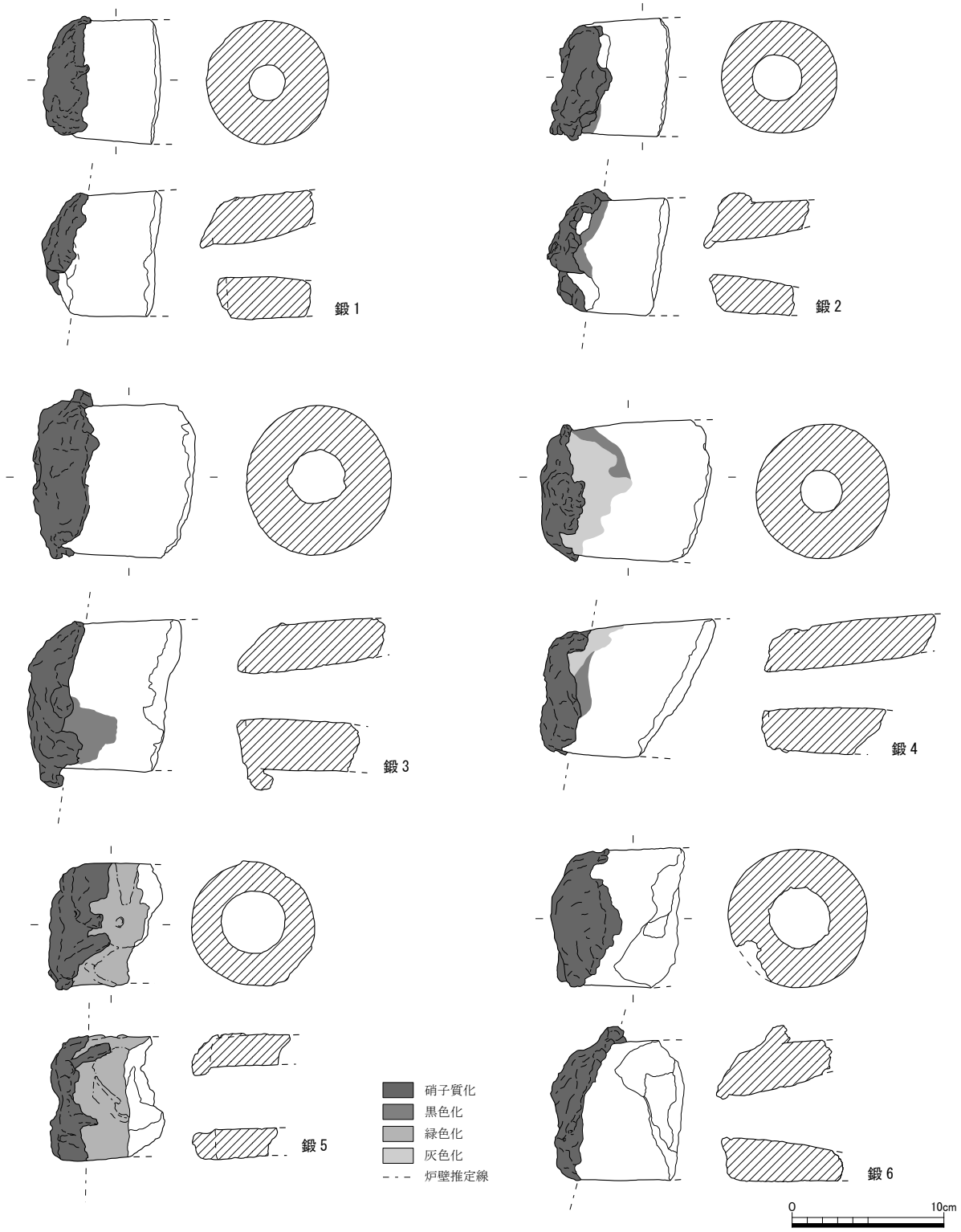


図 26　遺物実測図８（1/4）

5.まとめ

今回の調査では、平安時代から江戸時代の遺構・遺物を確認した。主な成果としては、江戸時代の鍛冶関連遺構と、平安時代から鎌倉時代の性格不明遺構 085 が挙げられる。以下、全体の変遷と各項目について詳述する。

（1）遺構の変遷

平安時代の遺構は平安時代中期と後期に大きく分けられる。平安時代中期は、大半が柱穴で、その他土坑と井戸 1 基を確認した。2・3 区全体に遺構が集中し、特に C グリッドの西半分から E グリッドにかけて 0.1 ～ 0.4 m もの厚い整地がされ、その上に柱穴が集中することも特徴的である。平安時代後期になると、柱穴や土坑が中心となる。性格不明遺構 085 について、詳細は後述するが、成立したのは平安時代中期から後期で、平安時代後期から鎌倉時代初頭にかけて一部作り替えがあり、鎌倉時代前期に埋め立てて整地する様子を確認した。

鎌倉時代の遺構は土坑や井戸、溝が中心である。鎌倉時代前期の遺構は柱穴、土坑、溝、井戸で、遺構数は少ない。鎌倉時代後期では前期の井戸周辺に土坑を掘り込む様子が確認できるが、遺構数はまばらである。室町時代の遺構は、前期は鎌倉時代と同じくまばらであるが、後期になると 2 区（A ～ C グリッド）に柱穴や土坑が集中する。礎石建物 1 もこの時期と考えられる。

江戸時代の遺構は鍛冶関連遺構と考えられる土坑のみである。3 区の D グリッド西半から E グリッドにかけてに集中する様子を確認した。

（2）鍛冶関連遺構について

本調査地は、現在の住所表記では「京都市下京区堺町通松原下る鍛冶屋町 254 番地」に位置する。町名の由来は、針金、釘、鋏、刃物などの鍛冶職の居住があることによるとされ、当町内でも 16 世紀から 19 世紀にかけて鍛冶屋が存在していたことがうかがえる（表 4）。

本調査地内では、D グリッド西半から E グリッドにかけての約 60 ㎡と、東に 10 m程度離れた B 2 グリッドの 10 ㎡程度の範囲で 17 世紀～ 18 世紀頃の鍛冶関連とみられる遺構が集中する様子が確認できた。

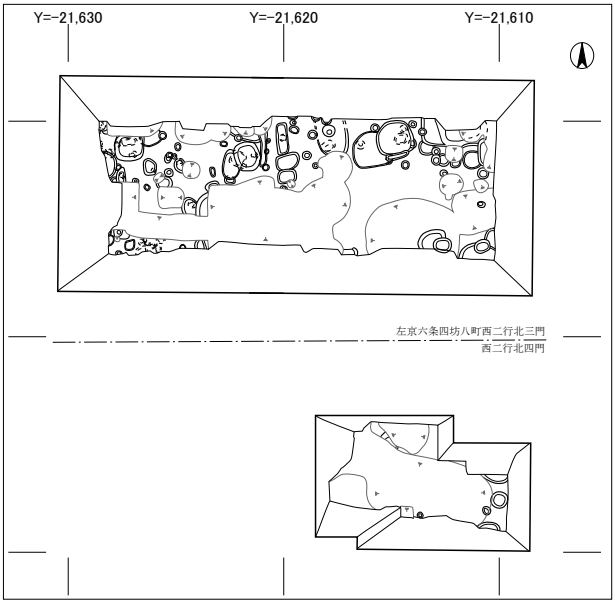
土坑の傾向としては大きく 4 種類に分けられ、①鉄滓を含まない土坑、②鉄滓を含む土坑、③鉄滓と鞴の羽口を大量に含む土坑、④焼土や炭化物で埋まる土坑である。①は土坑 167・170 で埋土に緑青が沈着すること、短軸長 0.9 m の木枠をもつことが共通する。②は土坑 158・171 で、鞴羽口は少量である。③は土坑 160・166 で、下層に粘土、中層に鉄滓や鞴羽口を多量に含み、上層を粘土で埋める共通点を持つ。④は土坑 030 である。

このうち、土坑 160 は上層に灰白色粘土が緩やかに湾曲して広がっており、下層に鉄分が沈着、鉄滓等が集中する様子から炉であったと考えられる。

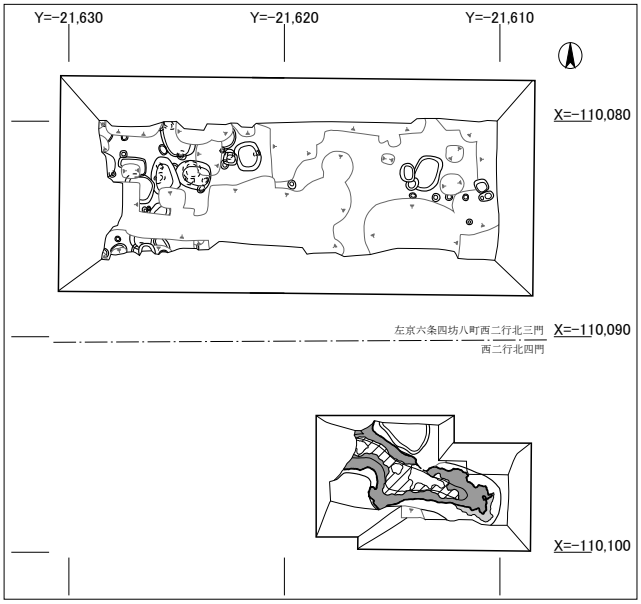
（3）性格不明遺構 085 について

1 区全面で確認した粘土敷の遺構である。先述したように、地山の砂礫層を大きく掘りこんでお

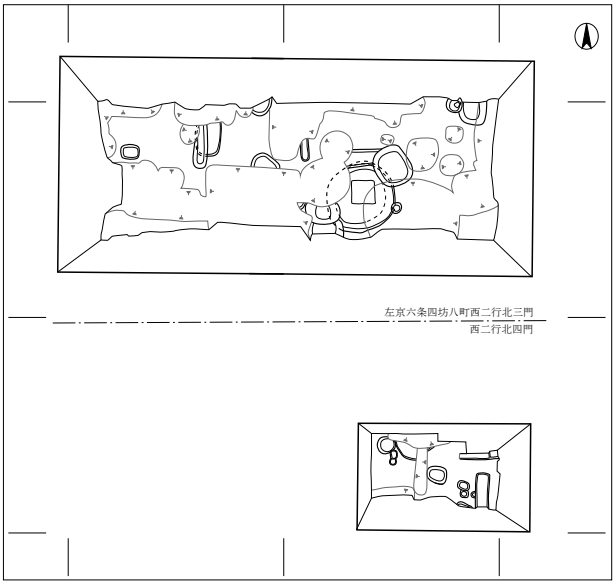
平安時代中期以前



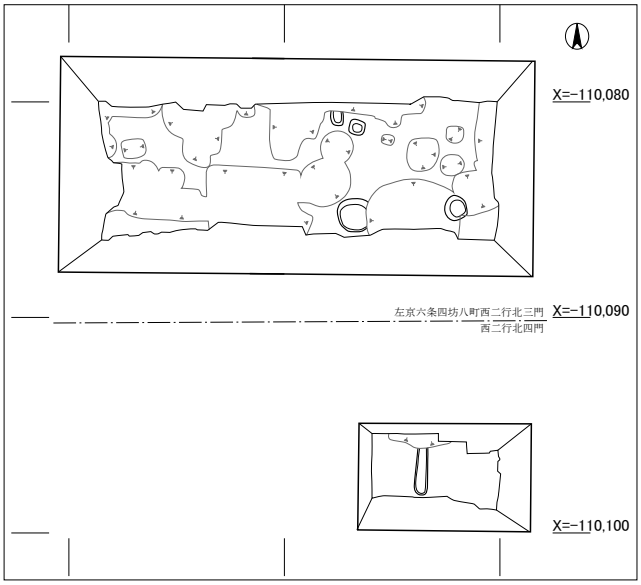
平安時代後期



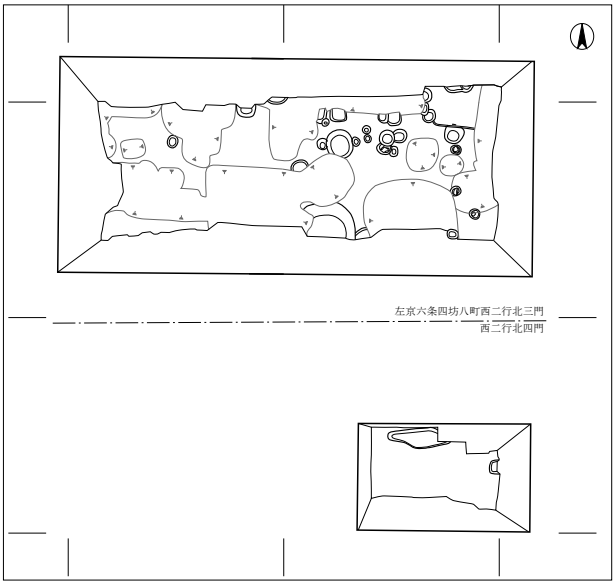
鎌倉時代



室町時代



戦国～桃山時代



江戸時代

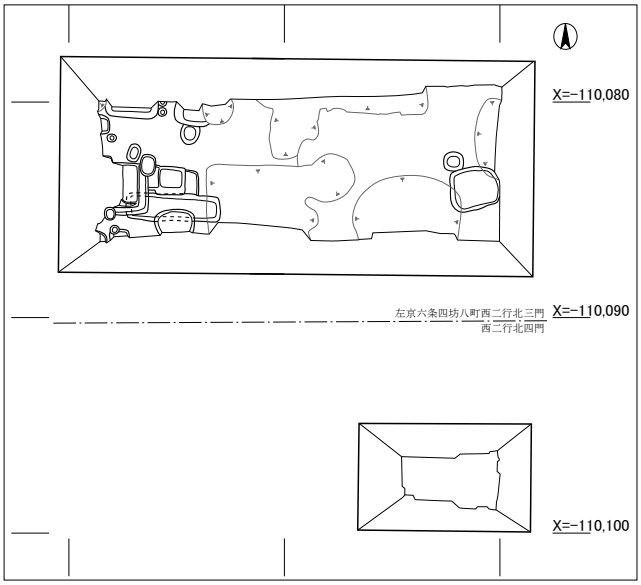


図 27　遺構変遷図

表４　鍛冶屋町変遷

元号	西暦	出来事	出典
永禄3	(1560)	「松原堺町下ル町」に刀鍛冶「藤原有次」が「有次」開業	『有次と庖丁』
寛永14	(1637)	「かじ屋町」	「寛永一四年洛中絵図」
寛文5	(1665)	「又は鉄輪の町といふ。いにしへ物ねたみふかき女あり。かしらに金輪をいただき、賀茂の明神にまうでたりしが、鬼になりてにくき人ともとりけるが、後にがうぶく(降伏)せられし。その塚いまにこの町にあり。」	『京雀』
寛文末	1673頃か	下鍛冶屋町	「寛文末洛中洛外大図」
貞享2	(1685)	堺町通の諸職商家に針がね屋とあり、また、「鍛冶屋」の項に、松原堺町下る有次、有信の名がある	『京羽二重』
宝暦年間		「宝暦年中二町に分れ、北を上鍛冶屋町とし、南を下鍛冶屋町とす。」	『京都坊目誌』
宝暦12	(1762)	北の「夕顔町」を「上鍛冶屋町」、当町を「下鍛冶屋町」	『京町鑑』
天保2	(1831)	「夕顔丁」、「鍛冶や丁」表記に戻る	「天保二年改正京町御絵図細見大成」
明治２	(1869)	「明治二年二月合して一町に復す」	『京都坊目誌』
明治期		15代目有次の頃、「有次」含め5軒の鍛冶屋があった。	『有次と庖丁』
明治期		「戦後、煙管屋がなくなり、一番多かった筆屋も少なくなり、弓屋も竹刀屋も…と移り変わったように、かれら職人の道具としての刃物の需要が一気になくなった。 　いつの間にか堺町通松原下ル鍛冶屋町の鍛冶屋は、［有次］を含めて全部途絶えてしまった」	『有次と庖丁』

江弘毅 2014『有次と庖丁』新潮社

り、掘方は直に落ちている。裏込めに黒色系粘土を敷き、緩やかな傾斜を作ったうえで、黄色系の粘土を 0.1 m程の厚さで貼っている。粘土の質は均一ではなく、キメの細かい丁寧な仕上げの部分や、粗い土が混じる部分、灰白色粘土のブロックが目立つ部分が混在した。なお、粘土が漆喰や三和土のような石灰質を含むものかを確認するため分析を行い、石灰は含まれていないことが判明した（附章)。粘土だけでここまで形状を保てるものかは疑問であったが、掘削直後の水分を含む状態では変化のなかった遺構が、乾燥した状態では崩壊しやすかったことから、本来の遺構の姿として水分が必要であったことは間違いないといえるのではないだろうか。

埋土にヘドロ等がたまっている様子は確認できなかったが、断面の様子から、①粘土敷の使用期、②１次埋立、③溝状に掘りこみ、石で補強、④２次埋立、⑤丁寧に整地する、５段階がみられる。

調査の段階で、上層（⑤)・中層（③・④)・下層（①・②）に分けて掘削し、上層は京都Ⅵ～Ⅶ期、中層はⅤ～Ⅵ期（Ⅴ期中心)、下層はⅣ～Ⅴ期の遺物が出土している。裏込や粘土に混じる遺物は小片ながらⅣ期が多いが、周囲のⅣ期の遺構が壊されており混入した可能性、もしくは遺構を造成する際に運ばれてきた土に古い遺物が入っていた可能性も考えられる。

では、粘土敷の使用用途はというと、不明である。地山を掘削して粘土を貼っているが、粘土を外した完掘時の底面の高さは31.54 m～31.68 mであった。井戸 124 の木枠底面（31.20 m）と 0.3 m程度の誤差はあるものの、木枠上部は 31.74 mであることから水が上がってくる可能性は否定できず、じわりと湧水がにじむ程度には湿度を持つことが想定される。この砂礫層に粘土を貼る意味としては、①砂礫からの湿気を防止する（防湿)、②砂礫に水が逃げないようにするため、の２つが考えられる。また、埋土の様子から考えると、ヘドロ等がたまっておらず、一度に埋め立てる様子が確認できることから、使用時にはある程度掃除されており、綺麗な状態であったことがうかがえる。

平面の形状は不整形だが連続する溝状であり、西壁及び北壁において分岐して調査区外へ延伸する様子が確認できていることや、粘土は乾くとぼろぼろと割れて塊で崩れてしまうことから、ある程度水が必要な施設であり、導水関連の施設と考えられる。

附章　平安京跡で検出された粘土の元素マッピング分析

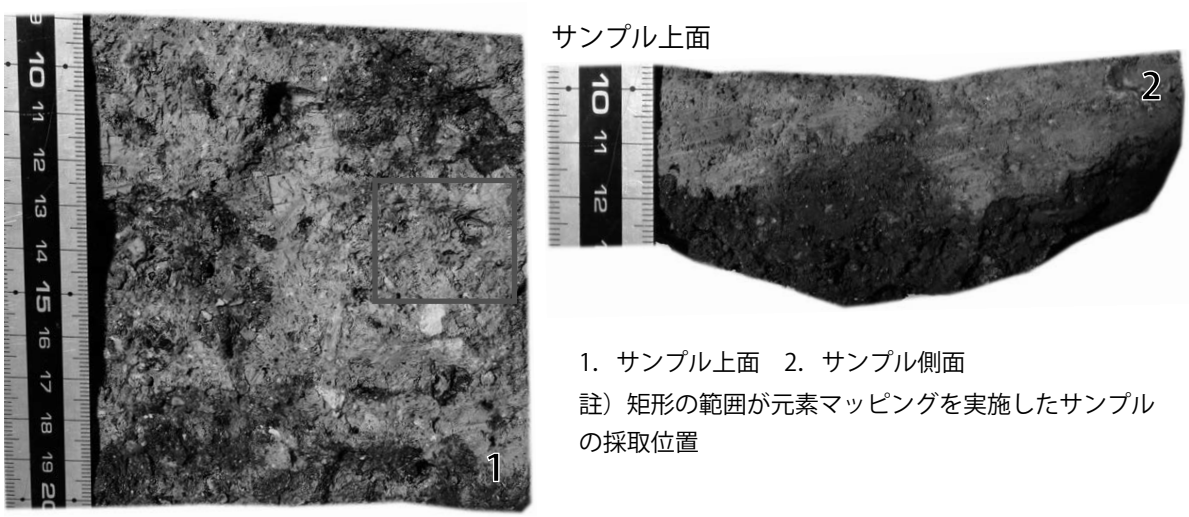
竹原弘展・辻　康男（パレオ・ラボ）

1. はじめに

下京区鍛冶屋町の平安京跡で検出された遺構に貼られていた粘土について、元素マッピング分析を行い、漆喰成分などが含まれていないか、材質を調査した。

2. 試料と方法

分析対象は、性格不明遺構 085 の側壁から底部に貼られた粘土である。不攪乱のブロックサンプルとして採取された試料写真と分析試料の採取位置を図 1 に示す。サンプルは、粗粒砂～極粗粒砂サイズの粗粒の砂粒子や 50 ～ 200mm 前後の小さな灰色の亜角礫状の粘土の偽礫（ブロック）が含まれる黄灰色を呈する粘土～シルトからなる泥である。元素マッピング分析試料は、砂粒子や粘土の偽礫の混入が目立たない領域から採取した。



附：図 1　採取試料と分析試料の採取位置

分析は、元素マッピング分析およびポイント分析を行った。採取された粘土ブロックの表面を測定した。

分析装置は、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置である株式会社堀場製作所製の分析顕微鏡 XGT-5000Type II を使用した。装置の仕様は、X 線管が最大 50kV、1.00mA のロジウム（Rh）ターゲット、X 線ビーム径が 100 μ m または 10 μ m、検出器は高純度 Si 検出器である。検出可能元素はナトリウム（Na）～ウラン（U）であるが、ナトリウムやマグネシウム（Mg）といった軽元素は蛍光 X 線分析装置の性質上、検出感度が悪い。本装置では、試料ステージを走査させながらの測定により、元素マッピング分析が可能となる。

測定は、まず断面試料全面の元素マッピング分析を行い、さらに、特徴的な箇所を選んでポイント分析を行った。測定条件は、元素マッピング分析が 50kV、1.00mA、ビーム径 100 μ m、測

定時間 10000s を 1 回走査、ポイント分析が 50kV、電流自動設定、ビーム径 100 μ m、測定時間 500s に設定した。定量分析は、標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法（以下、FP 法）による半定量分析を装置付属ソフトで行った。定量元素は、マグネシウム（MgO）、アルミニウム（Al_2O_3）、ケイ素（SiO_2）、リン（P_2O_5）、硫黄（SO_3）、カリウム（K_2O）、カルシウム（CaO）、チタン（TiO_2）、マンガン（MnO）、鉄（Fe_2O_3）、ルビジウム（Rb_2O）、ストロンチウム（SrO）、イットリウム（Y_2O_3）、ジルコニウム（ZrO_2）で、酸化物の形に換算した。

3. 結果

元素マッピング分析により得られたマグネシウム（Mg）、アルミニウム（Al）、ケイ素（Si）、リン（P）、硫黄（S）、カリウム（K）、カルシウム（Ca）、鉄（Fe）のマッピング図を、図 2 に示す。各マッピング図に示された a ～ e のポイント分析により得られた半定量値の一覧を表 1 に示す。

附：表 1　各ポイントの半定量分析結果（mass%）

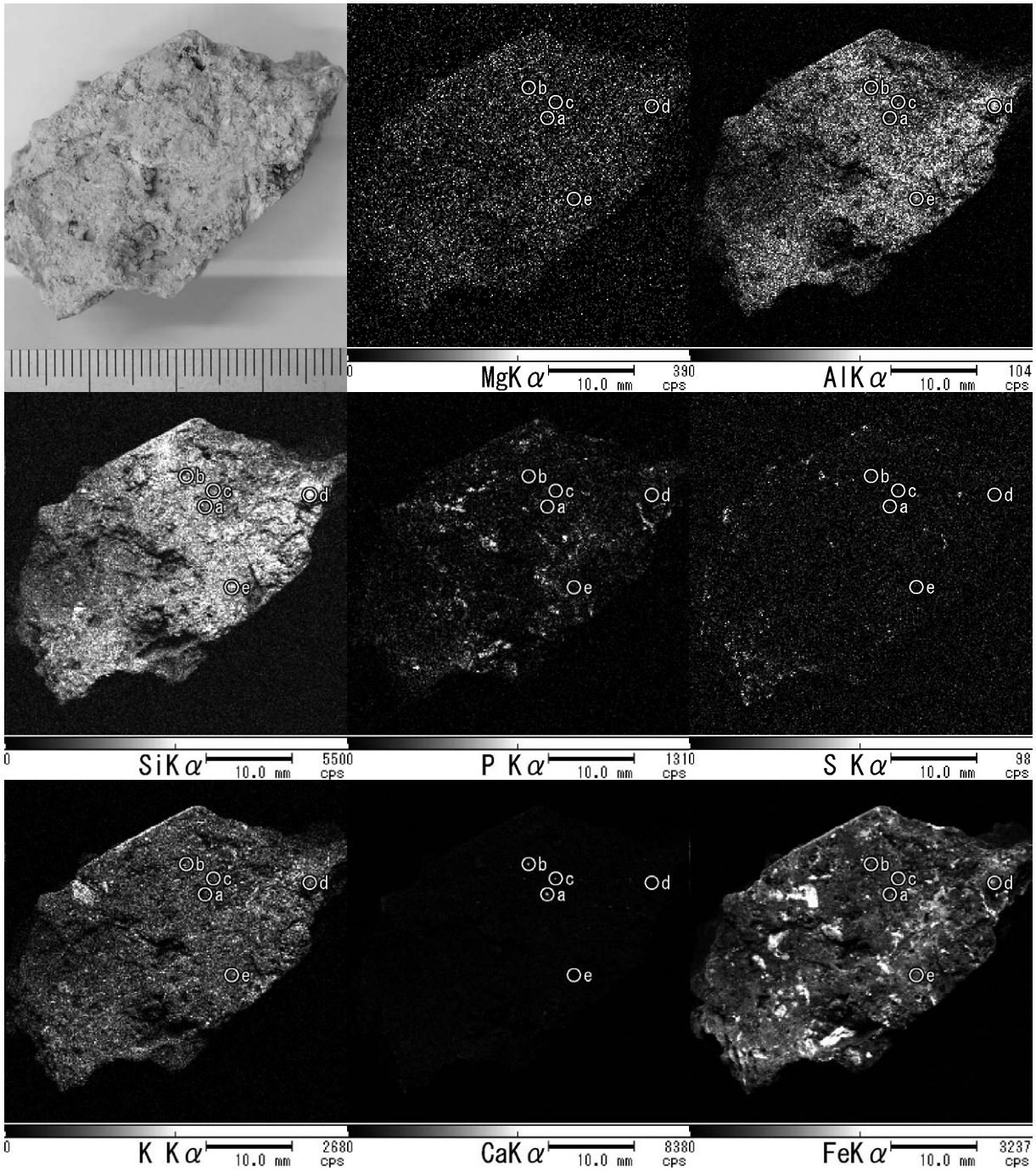
位置	MgO	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	SO_3	K_2O	CaO	TiO_2	MnO_2	Fe_2O_3	Rb_2O	SrO	Y_2O_3	ZrO_2
a	0.46	10.41	62.77	1.17	0.41	2.73	6.81	1.51	0.30	13.22	0.03	0.12	0.01	0.04
b	0.05	11.51	58.48	0.87	0.39	2.62	17.78	0.79	0.19	7.22	0.02	0.04	0.01	0.04
c	0.35	15.05	66.71	1.81	0.18	2.97	1.38	2.90	0.06	8.51	0.02	0.01	0.01	0.04
d	0.86	17.75	72.01	0.74	0.16	2.61	0.33	0.93	0.01	4.55	0.02	0.01	0.00	0.02
e	0.00	15.98	71.43	1.37	0.02	3.18	0.40	1.29	0.00	6.21	0.04	0.01	0.01	0.05

4. 考察

元素マッピング分析では、カルシウム（Ca）の輝度が高い箇所は少なく、かつ粒子状であった。カルシウム（Ca）の輝度が高い箇所のポイント分析では、カルシウム（CaO）が最大でも約 18% とそれほど多くなかった(ポイント a ～ c)。漆喰を使用して土を硬化させる、いわゆる三和土の場合、カルシウム（Ca）が基質として多く分布し、ポイント分析におけるカルシウム（CaO）含有量も極めて多くなる。今回の試料は、カルシウムが最も多い箇所が粒子状に僅かに分布するのみで、かつその粒子もカルシウムの含有量はそれほど多くないため、漆喰は使用されておらず、粘土の固結と考えられる。

5. おわりに

平安京跡で検出された性格不明遺構 085 の側壁から底部に貼られた粘土について分析した結果、漆喰を使用した三和土ではないと確認された。



附：図２　元素マッピング分析結果

Mg：マグネシウム　Al：アルミニウム　Si：ケイ素　P：リン　S：硫黄　K：カリウム　Ca：カルシウム　Fe：鉄

表５　出土遺物観察表

遺物番号	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調（胎土）	外面調整	内面調整	備考	時代
1	井戸029	磁器	手塩皿	8.9	0.9	6.3	灰白色	型押し	型押し		江戸時代
2	井戸029	染付	碗	8.8	6.3	4.3	胎土：灰白色 釉：透明	ロクロナデ	ロクロナデ		江戸時代
3	土坑167	土師器	皿S	10.3	2.2	3.1	橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		江戸時代
4	土坑167	陶器	小椀	5.4	4.7	3.4	にぶい黄橙色	ロクロナデ	ロクロナデ		江戸時代
5	土坑167	焼締陶器 (丹波)	擂鉢	32.3	14.6	11.6	暗褐色	ロクロナデ・オサエ	ロクロナデ		江戸時代
6	土坑160	土師器	皿Nr	4.9	1.2	1.2	にぶい橙	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		江戸時代
7	土坑160	土師器	皿Nr	5.2	1.1	2.0	にぶい橙	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ	墨書あり　灯明皿か	江戸時代
8	土坑160	土師器	皿Nr	5.4	1.0	2.6	にぶい橙	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		江戸時代
9	土坑160	土師器	皿Sb	9.3	1.8	2.4	黒褐色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		江戸時代
10	土坑160	土師器	皿S	10.0	2.1	3.5	橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ	灯明皿	江戸時代
11	土坑160	陶器	碗	9.3	6.1	4.3	胎土：淡黄色 釉：淡黄色	ロクロナデ	ロクロナデ	京焼系	江戸時代
12	土坑160	陶器	碗	9.4	6.2	4.8	胎土：灰白色 釉：淡黄色	ロクロナデ	ロクロナデ	京焼系	江戸時代
13	土坑160	陶器	平碗	12.2	4.8	4.4	胎土：淡黄色 釉：淡黄色	ロクロナデ	ロクロナデ	京焼系	江戸時代
14	土坑160	陶器	平碗	12.4	4.9	4.2	胎土：淡黄色 釉：淡黄色	ロクロナデ	ロクロナデ	京焼系	江戸時代
15	土坑160	陶器	碗	8.5	4.6	2.8	胎土：にぶい褐色 釉：灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ		江戸時代
16	土坑160	陶器	碗	10.2	6.2	3.9	胎土：黒褐色 釉：オリーブ黒色	ロクロナデ	ロクロナデ		江戸時代
17	土坑160	陶器	碗	11.2	5.3	3.7	胎土：暗赤褐色 釉：灰伯	ロクロナデ	ロクロナデ		江戸時代
18	土坑160	陶器	鉢	11.8	7.3	9.6	胎土：浅黄色 釉：灰伯	ロクロヘラケズリ・ 底部糸切り痕	ロクロナデ		江戸時代
19	土坑160	陶器	鉢	15.4	6.2	6.5		ロクロナデ	ロクロナデ		江戸時代
20	土坑160	染付	碗	9.7	5.4	3.6	胎土：灰白色 釉：透明	ロクロナデ	ロクロナデ		江戸時代
21	土坑160	染付	碗	9.8	5.3	3.9	胎土：灰白色 釉：透明	ロクロナデ	ロクロナデ		江戸時代
22	土坑160	染付	碗	9.8	5.6	4.0	胎土：灰白色 釉：透明	ロクロナデ	ロクロナデ		江戸時代
23	土坑160	染付	碗	10.0	5.0	3.5	胎土：灰白色 釉：透明	ロクロナデ	ロクロナデ		江戸時代
24	土坑160	染付	碗	10.0	5.5	3.7	胎土：灰白色 釉：透明	ロクロナデ	ロクロナデ		江戸時代
25	土坑160	染付	仏飯器	8.3	5.6	4.4	胎土：灰白色 釉：透明	ロクロナデ	ロクロナデ		江戸時代
26	土坑160	土製品	人形	幅 3.5	(3.1)	奥行 2.1	黄橙色	型合わせ成型・ケズリ調整	中実		江戸時代
27	土坑160	瓦質土器	鉢	22.1	(9.2)	17.3	橙色	ミガキ・ナデ	ナデ	脚付	江戸時代
28	土坑170	土師器	皿S	10.4	2.0	3.6	にぶい橙	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		江戸時代
29	土坑170	土師器	皿S	10.7	2.1	3.7	黒褐色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		江戸時代
30	土坑170	土師器	皿S	10.7	2.0	3.2	にぶい黄橙色・ 黒色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		江戸時代
31	土坑170	土師器	皿S	10.8	2.0	3.2	にぶい黄橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		江戸時代
32	土坑170	陶器	皿	29.0	7.0	9.6	胎土：暗赤褐色 釉：オリーブ黄	ロクロナデ	ロクロナデ		江戸時代
33	土坑170	焼締陶器 (丹波)	擂鉢	35.7	15.3	14.2	赤褐色	ロクロナデ・オサエ	ロクロナデ		江戸時代
34	土坑170	染付	碗	9.2	7.5	4.0	胎土：灰色 釉：透明	ロクロナデ	ロクロナデ		江戸時代
35	土坑170	瓦質土器	火鉢	12.1	11.9	－	外：にぶい黄橙色 内：灰黄褐色	板ナデ	ナデ		江戸時代
36	土坑171	土師器	皿Nr	5.3	1.1	2.6	橙	オサエ	ナデ		江戸時代
37	土坑171	土師器	皿Nr	5.5	1.0	2.6	にぶい橙	オサエ	ナデ		江戸時代
38	土坑171	土師器	皿Nr	7.3	1.7	2.0	浅黄橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		江戸時代
39	土坑171	土師器	皿Sb	9.4	2.1	2.9	にぶい橙	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		江戸時代
40	土坑171	土師器	皿S	10.2	1.9	3.5	橙	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ	灯明皿	江戸時代
41	土坑171	土師器	皿S	10.3	2.2	2.3	橙	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		江戸時代
42	土坑171	土師器	皿S	10.4	2.0	5.6	浅黄色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		江戸時代

遺物番号	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調（胎土）	外面調整	内面調整	備考	時代
43	土坑171	土製品	人形	長さ 5.2	2.8	幅 4.7	黄橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		江戸時代
44	土坑171	瓦質土器	鉢	12.2	6.2	8.8	外：暗灰 内：灰	ミガキ・ロクロナデ	ロクロナデ		江戸時代
45	土坑171	土師質土器	焙烙鍋	29.8	7.4	－	にぶい橙	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ		江戸時代
46	土坑171	陶器	碗	8.9	6.4	4.1	胎土：灰色 釉：淡黄色	ロクロナデ	ロクロナデ		江戸時代
47	土坑171	陶器	碗	10.1	6.9	4.2	胎土：淡黄色 釉：明黄褐色	ロクロナデ	ロクロナデ		江戸時代
48	土坑171	染付	碗	9.8	5.5	3.9	胎土：灰色 釉：透明	ロクロナデ	ロクロナデ		江戸時代
49	土坑171	染付	碗	9.6	5.4	4.3	胎土：灰色 釉：透明	ロクロナデ	ロクロナデ		江戸時代
50	土坑171	染付	碗	10.1	5.6	3.5	胎土：灰色 釉：透明	ロクロナデ	ロクロナデ		江戸時代
51	土坑171	染付	碗	10.9	6.4	4.2	胎土：灰色 釉：透明	ロクロナデ	ロクロナデ		江戸時代
52	土坑171	染付	皿	13.5	3.6	5.6	胎土：白 釉：透明	ロクロナデ	ロクロナデ		江戸時代
53	土坑171	染付	瓶	－	(15.3)	6.4	胎土：白 釉：透明	ロクロナデ	ロクロナデ		江戸時代
54	土坑171	染付	仏飯器	7.9	5.7	3.6	胎土：灰色 釉：透明	ロクロナデ	ロクロナデ		江戸時代
55	土器溜048	土師器	皿Sh	6.3	1.8	2.2	浅黄橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ	底部に爪痕残る	室町時代
56	土器溜048	土師器	皿Sh	6.7	1.8	2.5	橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		室町時代
57	土器溜048	土師器	皿Sh	6.9	1.6	2.1	浅黄橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ	爪痕残る	室町時代
58	土器溜048	土師器	皿Sh	7.1	2.0	2.0	灰白色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ	爪痕残る	室町時代
59	土器溜048	土師器	皿Sh	7.1	1.9	2.6	黄橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		室町時代
60	土器溜048	土師器	皿Sh	7.2	1.6	2.6	浅黄橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		室町時代
61	土器溜048	土師器	皿Sh	7.3	2.1	2.5	浅黄橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		室町時代
62	土器溜048	土師器	皿Sh	7.5	1.8	2.7	浅黄橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		室町時代
63	土器溜048	土師器	皿S	7.9	2.6	2.8	浅橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		室町時代
64	土器溜048	土師器	皿S	8.0	1.9	2.1	浅黄橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		室町時代
65	土器溜048	土師器	皿S	8.4	2.1	3.1	浅黄橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		室町時代
66	土器溜048	土師器	皿S	8.6	1.8	3.4	淡橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		室町時代
67	土器溜048	土師器	皿S	11.6	3.0	5.1	灰白色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		室町時代
68	土器溜048	土師器	皿S	12.2	2.8	3.9	浅黄橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		室町時代
69	土器溜048	土師器	皿S	12.5	2.7	5.9	浅黄橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		室町時代
70	土器溜048	土師器	皿S	16.3	3.1	8.2	浅黄橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		室町時代
71	土器溜048	土師器	皿S	20.6	(4.1)	－	浅黄橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		室町時代
72	土器溜048	土師器	皿N	7.2	1.1	3.2	橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		室町時代
73	土器溜048	土師器	皿N	7.2	1.6	3.3	浅黄橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		室町時代
74	土器溜048	土師器	皿N	7.3	1.5	3.1	橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		室町時代
75	土器溜048	土師器	皿N	8.6	2.1	3.2	橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		室町時代
76	土器溜048	土師器	皿N	8.7	1.7	3.6	浅黄橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		室町時代
77	土器溜048	土師器	皿N	11.1	2.4	2.8	橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		室町時代
78	土器溜048	土師器	皿N	11.5	2.8	4.6	橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		室町時代
79	土器溜048	土師器	皿N	11.8	(2.2)	－	にぶい橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		室町時代
80	土器溜048	土師器	皿N	11.9	2.9	3.1	浅黄橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		室町時代
81	土器溜048	土師器	皿N	12.8	2.5	－	にぶい橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		室町時代
82	土器溜048	土師器	皿N	13.1	(3.1)	－	にぶい橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		室町時代
83	土器溜048	土師器	皿N	13.8	2.9	7.3	にぶい橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		室町時代
84	土器溜048	瓦質土器	鍋	25.9	(5.5)	－	灰色	ヨコナデ・オサエ	ヘラケズリ		室町時代
85	土器溜048	施釉陶器	鉢	18.9	6.9	8.7	胎土：にぶい橙色 釉：灰白	ロクロナデ	ロクロナデ		室町時代

遺物番号	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調（胎土）	外面調整	内面調整	備考	時代
86	溝051	土師器	皿Ac	5.8	1.1	2.8	浅黄橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		鎌倉時代
87	井戸124下層	土師器	皿N	7.9	1.1	5.3	にぶい黄橙	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		鎌倉時代
88	井戸124	土師器	皿N	8.6	1.2	5.0	にぶい橙	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		鎌倉時代
89	井戸124	土師器	皿N	12.4	2.4	7.0	にぶい橙	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		鎌倉時代
90	井戸124	土師器	皿N	12.9	2.4	8.1	にぶい橙	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		鎌倉時代
91	井戸124	土師器	皿N	13.1	2.4	7.6	にぶい橙	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		鎌倉時代
92	土坑183	土師器	皿N	11.7	2.0	7.6	浅黄橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		平安時代
93	性格不明遺構085上層	土師器	皿Ac	5.7	1.1	4.3	灰白色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		平安時代
94	性格不明遺構085	土師器	皿A	9.0	1.5	4.4	にぶい黄橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ		平安時代
95	性格不明遺構085	土師器	皿N	8.1	1.2	4.7	浅黄橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		平安時代
96	性格不明遺構085上層	土師器	皿N	10.3	1.5	5.6	にぶい黄橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		平安時代
97	性格不明遺構085上層	土師器	皿N	13.2	2.9	3.4	灰黄色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		平安時代
98	性格不明遺構085上層	土師器	皿N	14.1	2.4	8.3	赤橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		平安時代
99	性格不明遺構085	土師器	皿N	15.0	2.6	7.9	橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		平安時代
100	性格不明遺構085上層	土師器	皿S	11.6	2.8	3.3	灰白色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		平安時代
101	性格不明遺構085中層	土師器	皿Ac	6.0	1.0	3.1	灰色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		平安時代
102	性格不明遺構085中層	土師器	皿N	8.5	1.3	4.0	浅橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		平安時代
103	性格不明遺構085中層	土師器	皿N	10.3	1.7	3.0	灰白色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		平安時代
104	性格不明遺構085中層	土師器	皿N	13.9	2.5	6.5	淡橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		平安時代
105	性格不明遺構085下層	土師器	皿N	9.6	1.3	5.8	にぶい橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		平安時代
106	性格不明遺構085下層	土師器	皿N	13.2	2.8	6.3	にぶい橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		平安時代
107	性格不明遺構085下層	土師器	皿N	13.6	(3.1)	－	にぶい黄橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		平安時代
108	性格不明遺構085	白磁	碗	9.6	2.5	4.0	淡黄色	ロクロナデ	ロクロナデ	底部外面に墨書あり	平安時代
109	性格不明遺構085	輸入陶器	盤	22.2	(4.8)	－	オリーブ黄色	ロクロナデ	ロクロナデ		平安時代
110	性格不明遺構085	瓦器	皿	8.7	(1.9)	－	暗灰色	ナデ	ナデ		平安時代
111	性格不明遺構085上層	須恵器	甕	20.9	(6.1)	－	灰白色	ロクロナデ・平行タタキ	ロクロナデ・ナデ		平安時代
112	性格不明遺構085下層	須恵器	甕	27.8	(12.4)	－	灰色	ロクロナデ・平行タタキ	ロクロナデ・ナデ		平安時代
113	性格不明遺構085下層	須恵器	甕	28.5	(7.0)	－	灰色	ロクロナデ・格子面タタキ	ロクロナデ・ナデ		平安時代
114	性格不明遺構085	須恵器	甕	28.5	(12.1)	－	浅橙色	ロクロナデ・タテハケ・格子面タタキ	ロクロナデ・ヨコハケ		平安時代
115	性格不明遺構085下層	須恵器	甕	30.9	(8.8)	－	灰色	ロクロナデ・格子面タタキ	ロクロナデ・ナデ		平安時代
116	性格不明遺構085下層	須恵器	甕	31.2	(9.6)	－	灰色	ロクロナデ・格子面タタキ	ロクロナデ・ナデ		平安時代
117	性格不明遺構085下層	須恵器	甕	34.8	(14.6)	－	灰白色	ロクロナデ・格子面タタキ	ロクロナデ・ナデ	亀山焼	平安時代
118	性格不明遺構085中層	灰釉陶器	椀	－	(2.0)	7.4	灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	黒色付着物あり	平安時代
119	土坑286	土師器	皿Ac	8.9	1.6	3.4	灰白色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		平安時代
120	土坑286	土師器	皿A	9.6	1.3	5.0	浅黄橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		平安時代
121	土坑286	土師器	皿N	8.5	1.6	2.4	灰白色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ	灯明皿	平安時代
122	土器溜052	土師器	皿N	15.3	2.8	6.5	浅黄橙色	ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ		平安時代

表６　出土石製品観察表

遺物番号	遺構名	種類	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	色調	備考
石1	井戸029	石製品	砥石	(11.6)	4.6	1.4	浅黄色	頁岩製
石2	土坑184	石製品	硯	(10.1)	(7.3)	器高 (1.2)	暗青灰	粘板岩製
石3	土坑185	石製品	石鍋	口径 25.5	—	器高 (9.9)	灰白色	滑石製

表７　出土瓦観察表

遺物番号	遺構名	種類	器種	瓦当幅 (cm)	瓦当高 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	色調（胎土）	凸面調整	凹面調整
瓦1	井戸029	瓦	丸瓦	—	—	(6.0)	(10.2)	1.7	浅黄色	ナデ、刻印	
瓦2	井戸029	瓦	丸瓦	—	—	(7.8)	(8.6)	1.8	浅黄色	ナデ、刻印	
瓦3	井戸124 下層	瓦	巴文軒丸瓦	11.4	11.3	—	—	瓦当厚 1.6	にぶい黄橙	—	—
瓦4	性格不明遺構085	瓦	複弁蓮華文軒丸瓦	推定径 12.2	(9.1)	—	(8.1)	瓦当厚 1.7	淡黄色	—	—
瓦5	井戸124	瓦	斜格子文軒平瓦	(5.5)	4.0	(6.7)	(5.4)	2.1	灰白色	ナデ	布目痕
瓦6	土坑183	瓦	剣頭文軒平瓦	(3.3)	3.0	(7.9)	(6.5)	1.3	にぶい橙	タタキ	ナデ、格子状の刻み、布目痕
瓦7	性格不明遺構085	瓦	剣頭文・巴軒平瓦	(9.0)	3.6	(5.5)	(9.0)	1.8	外：灰白色 内：暗オリーブ灰	タタキ	布目痕後ナデ
瓦8	性格不明遺構085	瓦	斜格子文軒平瓦	(10.0)	(4.3)	(7.7)	(7.0)	1.8	外：灰白色 内：淡赤橙色	摩滅	摩滅
瓦9	性格不明遺構085	瓦	唐草文軒平瓦	(13.0)	4.6	(9.6)	(13.0)	2.0	灰白色	ナデ	布目痕
瓦10	性格不明遺構085	瓦	唐草文軒平瓦	(8.0)	3.6	(7.2)	(8.0)	1.7	褐灰色	ナデ	布目痕

表８　出土鍛冶関連遺物観察表

遺物番号	遺構名	種類	器種	外径 (cm)	器高 (cm)	孔径 (cm)	色調（胎土）	外面調整	内面調整
鍛1	土坑160	鍛冶関連遺物	鞴羽口	8.0	(7.3)	2.4	胎土：橙色 付着物：黒色	ナデ	ナデ
鍛2	土坑160	鍛冶関連遺物	鞴羽口	7.4	(6.9)	3.2	胎土：橙色 付着物：灰色	ナデ	ナデ
鍛3	土坑166	鍛冶関連遺物	鞴羽口	9.9	(9.7)	3.9	胎土：橙色 付着物：赤黒色	ナデ	ナデ
鍛4	土坑166	鍛冶関連遺物	鞴羽口	8.8	(11.5)	2.7	胎土：にぶい橙色 付着物：黒色	ナデ	ナデ
鍛5	土坑167	鍛冶関連遺物	鞴羽口	8.1	(6.5)	4.2	胎土：黄橙色 付着物：深緑色	ナデ	ナデ
鍛6	土坑170	鍛冶関連遺物	鞴羽口	9.1	(7.7)	4.0	胎土：橙色 付着物：暗赤褐色	ナデ	ナデ

※法量の( )内は残存値を示す。

図　　版

３区第１遺構面　全景（東から）

２区第１遺構面　全景（東から）

図版2

１区第１遺構面　全景（東から）

１区第２遺構面　全景（東から）

３区第２遺構面　全景（東から）

２区第２遺構面　全景（東から）

１区第３遺構面上層　全景（東から）

１区第３遺構面下層　全景（東から）

３区第３遺構面　全景（東から）

２区第３遺構面　全景（東から）

３区第４遺構面　全景（東から）

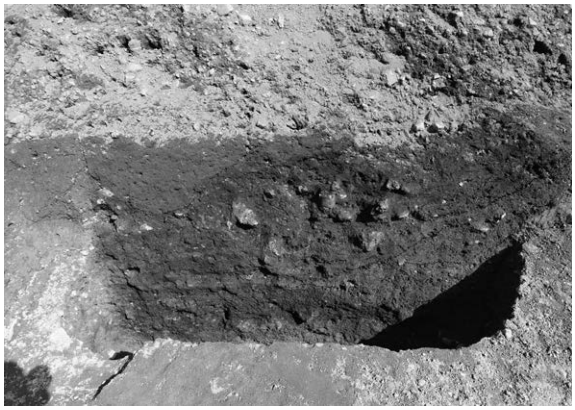
２区第４遺構面　全景（東から）

井戸 047（南から）

土坑 030（西から）

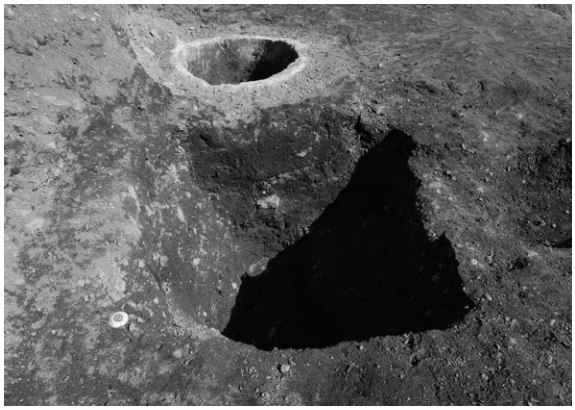
土坑 158（北から）

土坑 170（東から）



土坑 166（南から）

土坑 160（東から）



土坑 167（西から）

土器溜 048（北から）

礎石建物１　検出（東から）

礎石建物１　検出（北から）

溝 051（南から）

井戸 124（西から）

集石遺構 288（南から）

性格不明遺構 085　断面（東から）

性格不明遺構 085　遺物出土状況（南西から）

性格不明遺構 085　遺物出土状況（東から）

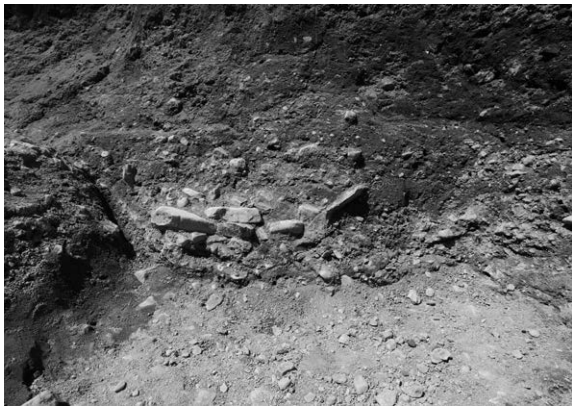
性格不明遺構 085（東から）

性格不明遺構 085（西から）

性格不明遺構 085（西から）

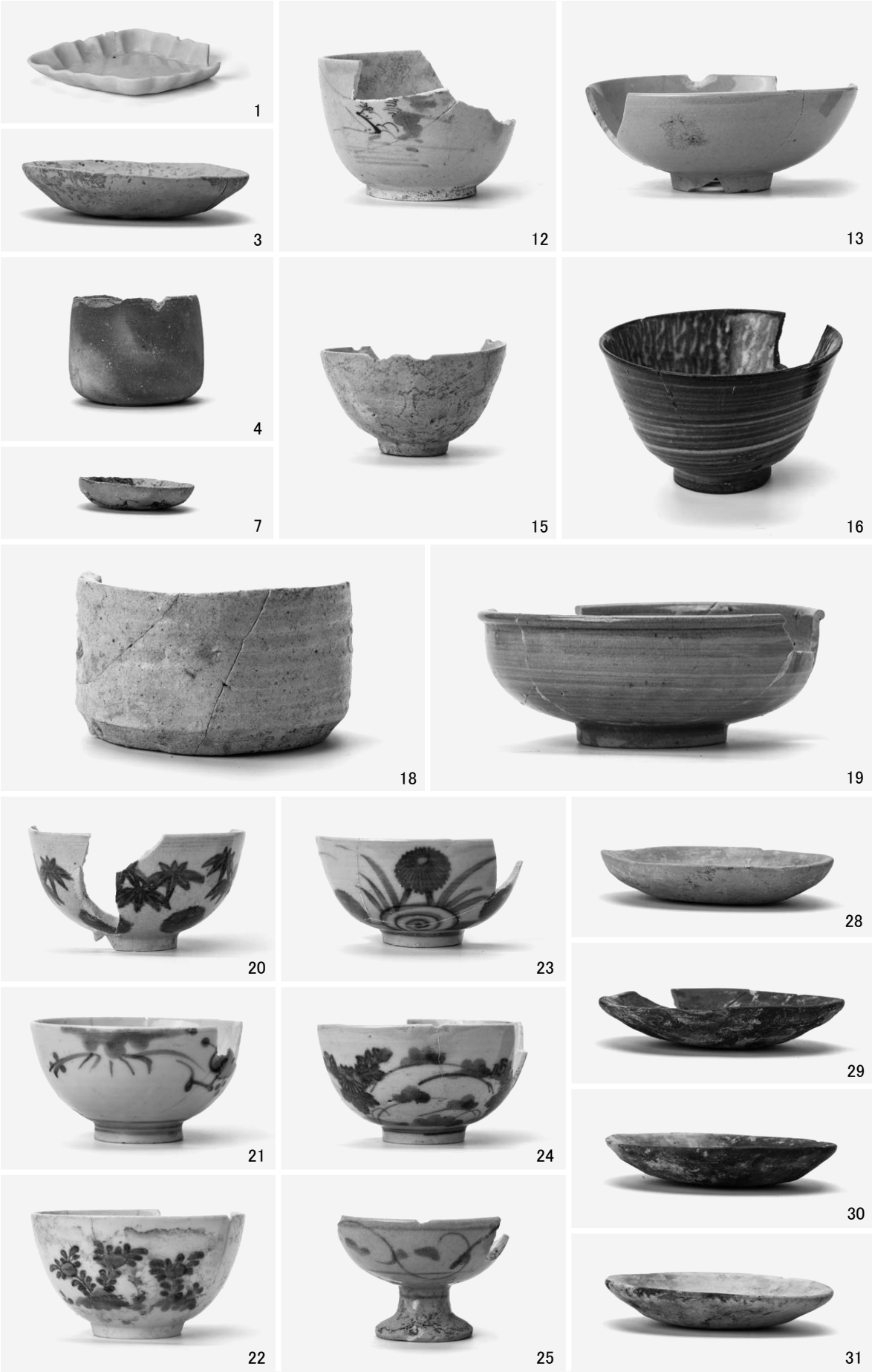
性格不明遺構 085　断面（東から）

性格不明遺構 085　拡張前断面（東から）



性格不明遺構 085　粘土掘削後断面（東から）

性格不明遺構 085　粘土掘削後断面（南から）



出土遺物１

27

36

37

38

32

39

40

44

49

55

46

50

56

47

51

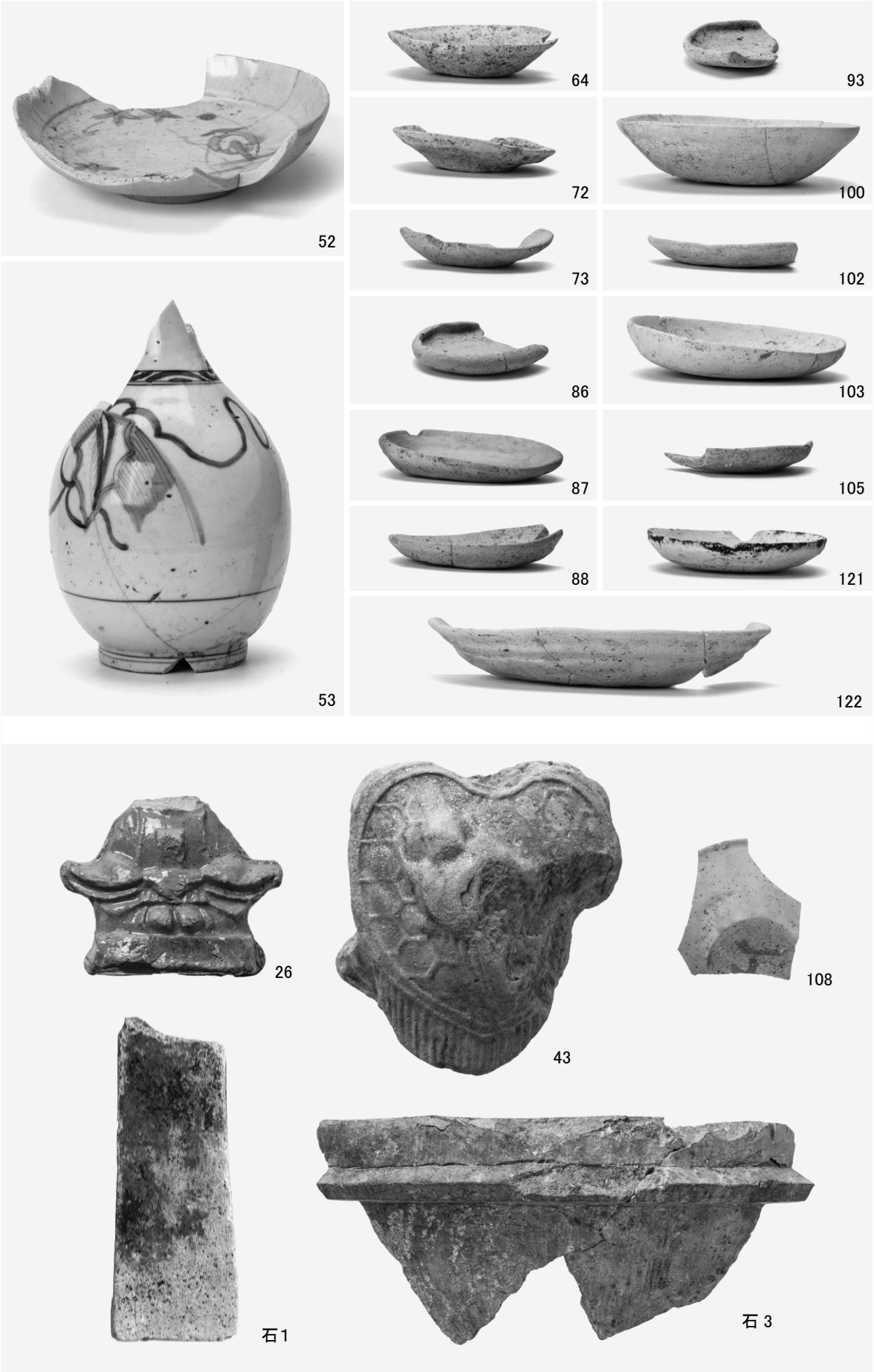
58

48

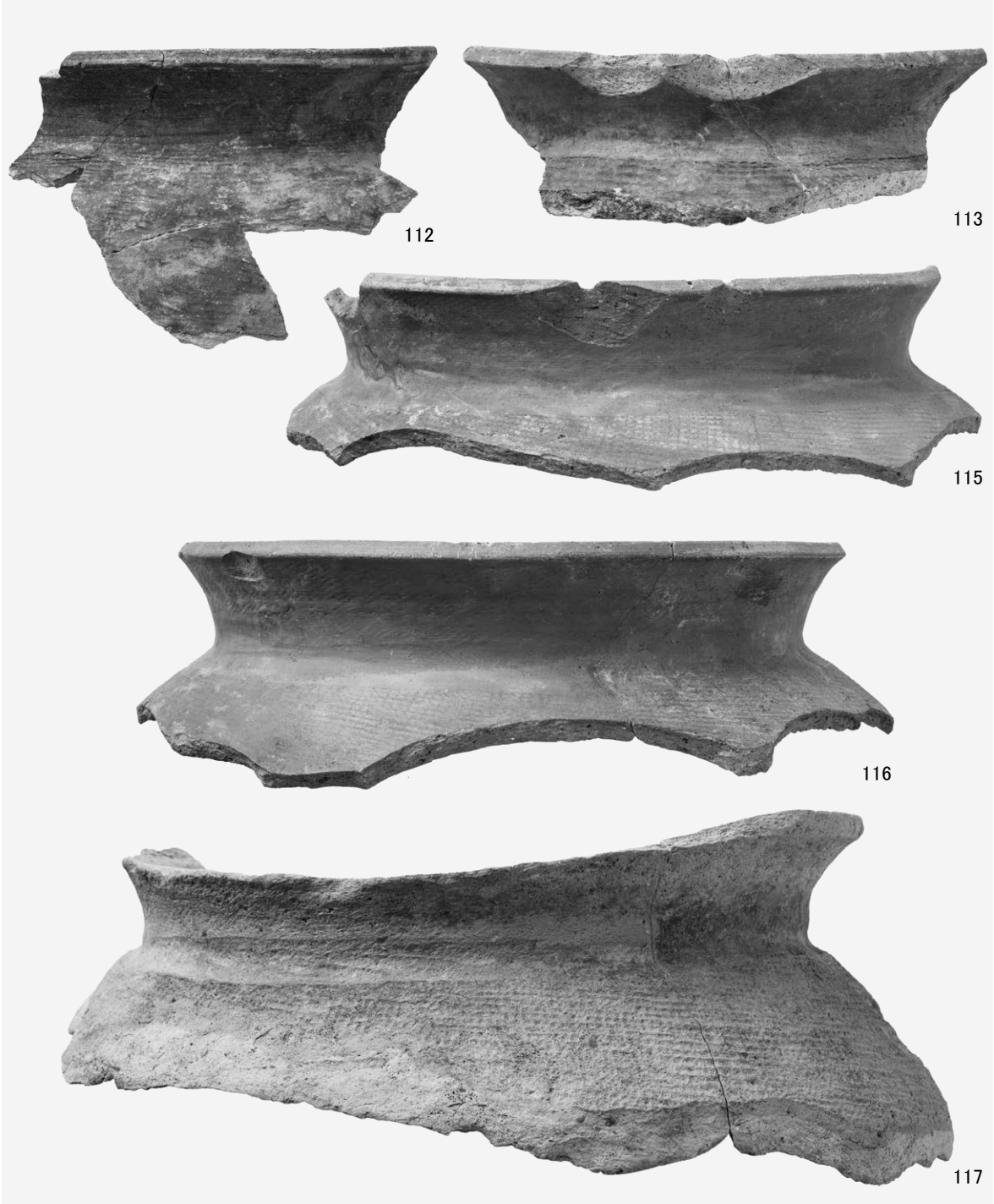
54

59

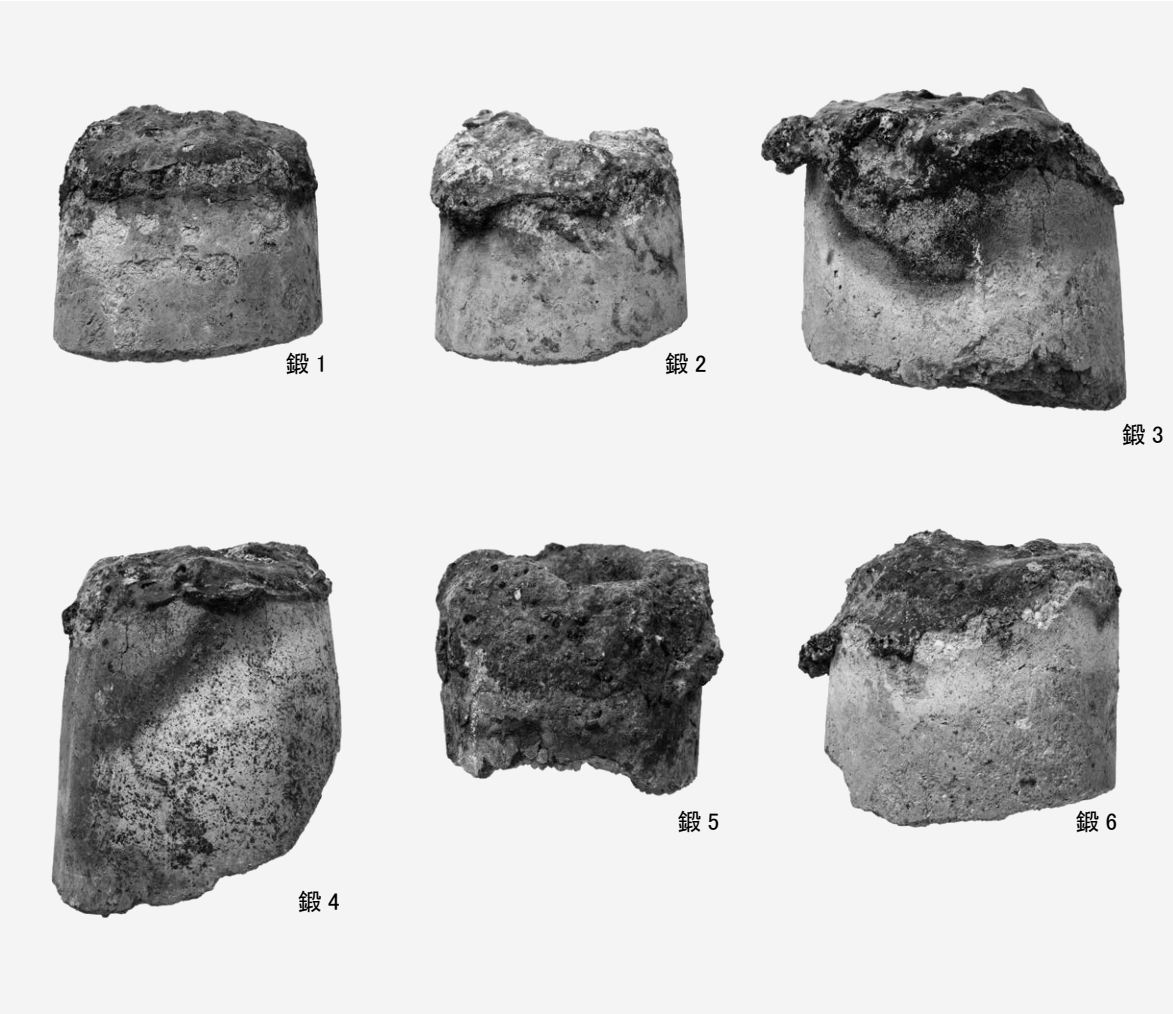
出土遺物２



出土遺物３



出土遺物４



出土遺物 5

鍛冶関連遺物（土坑 166 出土）

報　告　書　抄　録

ふ　り　が　な	へいあんきょうさきょうろくじょうしぼうはっちょうあと
書　　名	平安京左京六条四坊八町跡
シ リ ー ズ 名	アルケス発掘調査報告
シリーズ番号	5
編　著　者　名	石井明日香
編　集　機　関	株式会社アルケス
所　　在　　地	京都市山科区西野山中臣町75番地6
発　　行　　所	株式会社アルケス
発 行 年 月 日	西暦2022年12月27日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平安京（へいあんきょう） 左京六条四坊（さきょうろくじょうしぼう） 八町跡（はっちょうあと）	京都市下京区（きょうとししもぎょうく） 堺町通松原下（さかいまちどおりまつばらさが） る鍛冶屋町（かじやちょう）254 番地（ばんち）	26100	1	34度 59分 54秒	135度 45分 47秒	2022年2月7日～2022年4月19日	276.39㎡	集合住宅建築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京 左京六条四坊 八町跡	都城跡	平安時代	ピット、土坑、井戸、性格不明遺構	土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦器、磁器、輸入陶器	
		鎌倉時代	ピット、土坑、井戸、溝	土師器、瓦、石製品	
		室町時代	ピット、土坑、溝、礎石建物、土器溜	土師器、施釉陶器、瓦質土器、石製品	
		江戸時代	ピット、土坑、井戸、鍛冶関連遺構	土師器、施釉陶器、磁器、焼締陶器、瓦質土器、土製品、瓦、石製品、鍛冶関連遺物	

平安京左京六条四坊八町跡

発行日　2022年12月27日

編　集
発　行　株式会社アルケス

住　所　京都市山科区西野山中臣町75番地6
〒607-8305　TEL 075-582-5172

印　刷　奥田印刷株式会社